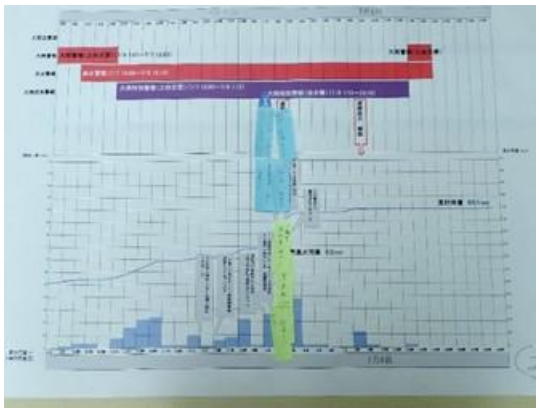
災害・避難カードを作成する取組みの手引き
～一人ひとりの避難手順を考えるために～



平成３１年３月　岐阜県

目　次

第１章　災害・避難カードを作成する取組みについて 1
１．災害・避難カードとは.....1
２．岐阜県における災害・避難カード作成の取組み 1

第２章　実施にあたっての留意事項 3
１．取組みの目的について.....3
２．取組みの内容について.....3
３．取組みの効果について.....3
４．実施する地域について.....4
５．取組みの補助について.....4
６．取組み後について.....4

第３章　災害・避難カード作成のポイント 5
１．この手引きについて 5
２．住民が学ぶ３つのポイント 5

第４章　災害・避難カードを作成する取組みの手順 6
１．取組みの実施手順.....6
２．主催者による事前準備.....7
手順１－１　地域の特徴を知る.....7
手順１－２　地域の災害・避難カードの様式を作る.....8
手順１－３　取組みの内容を決める 15
３．地域住民による勉強会.....20
手順２－１　取組みの目的を理解する.....20
手順２－２　地域における災害リスクを知り、 早めの避難の重要性を学ぶ.....21
手順２－３　災害の危険を回避するための情報を学ぶ 46
手順２－４　一人ひとりの避難の手順を学ぶ.....54
手順２－５　災害・避難カードを作る.....62
手順２－６　地域内での普及・活用方法を考える 64

第1章　災害・避難カードを作成する取組みについて

1. 災害・避難カードとは

●災害・避難カードとは、災害発生時に、どんな情報をもとに、どの経路で、どこに避難するのか等、災害から命を守る手順を一目で分かるように整理したカードです。

●住民のみなさまが、過去の災害の記憶（情報）や避難経路上の危険箇所、避難に要する時間、必要な防災対策（要配慮者への声かけ等）などを自らの手で整理した上で、災害・避難カードを作成していきます。

●作成した災害・避難カードは、自宅の冷蔵庫に貼るなど、普段から目にとまるようにします。また、防災訓練では地域ぐるみで災害・避難カードに沿って避難判断と避難行動の手順を確認し、改善が必要な点があれば、災害・避難カードに反映します。

2. 岐阜県における災害・避難カード作成の取組み

●平成２７～２９年度にかけて、内閣府による災害・避難カードを作成する取組みのモデル事業が、全国８地区で実施されました。

●このうち、愛媛県大洲市では、平成３０年７月豪雨災害の際に、地域住民一人ひとりが災害・避難カード作成を通じて避難先と避難行動をあらかじめ確認しておいたことが速やかな避難を可能とし、人的被害の防止につながった事例がありました。

●また、平成３０年７月豪雨災害を受け、同年岐阜大学と岐阜県が共同で実施した「豪雨災害時の住民避難行動実証研究」では、当豪雨災害に際し、避難した人は「ハザードマップの確認」、「避難場所、避難経路の確認」等、事前の備えを行っている傾向にあることや、「避難情報」や「洪水警報の危険度分布」、「自然災害の危険度」の理解度が高いと避難し、逆に低いと避難しない傾向にあることが分かりました。

●その結果、当時、避難した人は「ハザードマップの確認」、「避難場所、避難経路の確認」等、事前の備えを行っている傾向にあることや、「避難情報」や「洪水警報の危険度分布」、「自然災害の危険度」の理解度が高いと避難し、逆に低いと避難しない傾向にあることが分かりました。

●こうした理由から岐阜県では、災害に関する情報の理解度向上を図るとともに、住民が自らの避難行動を考え備える「自助」の強化を図るため、災害・避難カードの作成をとおして、地域住民のみなさま一人ひとりが避難方法やタイミング、避難経路などについて話し合い、災害時にどのように行動するかを事前に決める取組を推進することとなりました。

●本手引書は、平成３０年度に関市上之保地区と下呂市金山地区で実施したモデル事業で得た成果を皆さまに活用していただけるよう、災害・避難カード作成のポイントや手順を整理したものです。

第2章　実施にあたっての留意事項

1. 取組みの目的について

●当取組みは「早めの避難の完了」、「避難行動の実効性の向上」、「避難率の向上」により、「住民一人ひとりが自ら命を守る」ことを目的としています。

●当取組みは、カードを作成することが目的ではなく、住民一人ひとりに避難の手順を考えてもらい決定するプロセスが重要です。よって、繰り返し住民に問いかけることによって自ら「早めの避難」という決断と行動に結び付けることが必要です。

●大雨の発生のメカニズムや治山治水の仕組み等、専門的知識を伝授することに固執する必要はありません。住民が自ら考えることを最重要視して、命を守るための手順や知識を習得してもらうことが大切です。

●災害発生直前に自治会長等、地域のリーダーがたった一人で住民の避難を呼びかけることには自ずと限界があります。一人ひとりに避難を行う重要性を平素より気づいてもらうことが大切なことであり、そのための気付きの場や訓練等を日常から設けることが本取組の狙いです。

2. 取組みの内容について

●各市町村にて実施している既存の防災に関する取組みがある場合、学ぶべき３つのポイントを踏襲し、当取組みの内容を既存のものと融合して行っていただいてもかまいません。

3. 取組みの効果について

●本取組みは、以下のような地域の課題を解決するのに効果が高いと思われます。

・避難行動に対する住民の意識が低く、主体的に避難可能かどうか不安である。

・地域に災害時の連絡網や要配慮者等への声掛けの体制等はあるが、手順が明確でなく、実効性に不安がある。

・災害時に、地域の防災に関する課題が明らかとなり、改善する必要性がある。

・集落から指定避難所や指定緊急避難場所までの距離が長く、たどり着くのに多くの時間を要する。

・避難所が浸水想定区域内や土砂災害（特別）警戒区域内に立地しており、見直す必要がある。

・要配慮者を安全に避難所まで誘導するのに不安がある。　　等

4. 実施する地域について

●取組みを実施する地区の規模は、ワークショップへの参加率等を考慮すると 100～300 世帯程度が望ましいです。

※平成 30 年度に実施したモデル事業では、100 世帯程度であり、各ワークショップへの参加人数は３０名前後でした。

5. 取組みの補助について

●取組みを進めるにあたり、実施者の資料作成等の技術が乏しい等、課題がある場合は、必要に応じて行政や防災士、地域活動のサポートに熟練した専門家や団体が下記内容等についてサポートを行ってください。

・取組みのプランを立案する際に必要となる資料の提供（ハザードマップや非常時持出品リスト等）。

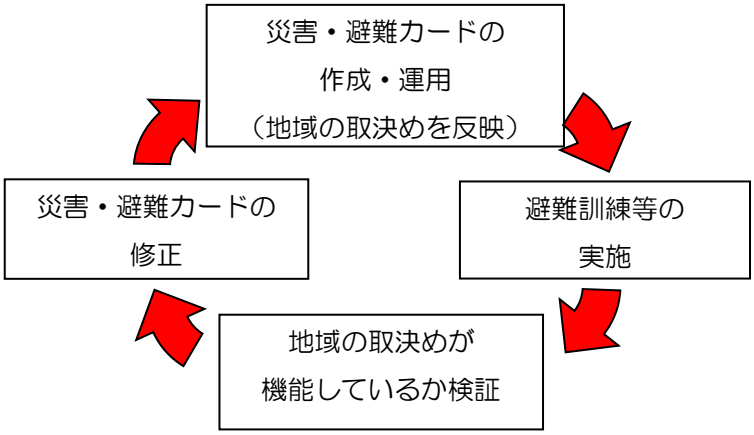
・ワークショップで使用する資料の作成（パソコン作業等）。

・グループワークの進行を補助する要員の動員（住民意見の聞取りや付箋への代筆、意見の集約）。

6. 取組み後について

●取組みに参加できなかった方のために、災害・避難カードの様式及び記入の説明書を添えて各戸に配布してください。ただし、説明書だけでは本取組の狙いが十分に理解できないことが考えられるため、別途、取組みを行った地域にてイベントの開催にあわせて学んだことを教えあう取組みを行うことが効果的です。

●当取組みは、既存の地域における取決め等を踏まえ、住民一人ひとりが避難を考え実行するために手順を決める取組みです。よって、あらかじめ地域の取決めをまとめたものを配布するなどして周知する必要があります。また、避難の手順を決め、災害・避難カードを作成した後は、避難訓練等で実際に運用し、地域の取決めを踏まえた個人の避難手順として問題が無いかを確認する場を設け、必要であれば修正を施して運用を続けます。



第3章　災害・避難カード作成のポイント

1. この手引きについて

●当取組では、地域住民（参加者）が、「住民一人ひとりが自ら命を守る」ために避難方法や避難開始のタイミング、避難経路などを整理します。この手引きには、災害・避難カードの作成を通じて地域住民が学ぶべきポイントとその手順を示しています。

2. 住民が学ぶ3つのポイント

●災害・避難カードを作成するうえで考えるべきポイントは以下の３点です。

その１　地域における災害リスクを知り、早めの避難の重要性を学ぶ

地域において、災害の歴史や被害の状況・規模、浸水や土砂災害の発生が予想される区域など、地域に潜む災害のリスクを知り、自宅や避難途中に災害に遭わないための早めの避難や事前の備えの重要性を学びます。

その２　危険を回避するための情報を学ぶ

大雨による災害は、前触れなく起きることはありません。数日前からテレビやラジオなどをとおして、天気予報、雲の動き、他地域の降雨状況や被害状況を確認することができます。

危険な状況に巻き込まれずに安全無事に避難を完了するためには、このような情報の入手方法と内容を理解することが必要となります。

その３　一人ひとりの避難の手順を学ぶ

避難には、避難開始の判断、避難経路の設定、家族や近所への声掛け、身支度や所持品の準備等、様々な判断と備えが必要です。また、避難の判断が早くても、避難の準備や移動に時間がかかっては、避難途中で危険に遭う可能性も高まります。まだ安全なうちに確実に安全な場所に避難するためには、あらかじめ、避難の手順を検討し、準備を済ませておく必要があります。

●これらの３つのポイントを学んだ上で、避難判断・避難行動に役立つ一人ひとりの災害・避難カードを作成することとします。

第4章　災害・避難カードを作成する取組みの手順

1. 取組みの実施手順

取組みは以下の手順に従い実施します。

＜主催者による事前準備（地域の状況に合った取組内容の検討）＞

手順	概要	掲載頁
手順１－１ 地域の特徴を知る	①地域情報の収集整理 ・近年の被災履歴や被害状況の確認 ・自治会等の体制や防災に関する取決めの確認 ・地域コミュニティの活動状況の確認 ・地域が抱える課題の確認　等	7
手順１－２ 地域の災害・避難カードの様式を作る	①ひな型ファイルの入手 ②地図データ等の作成・更新 ③危険情報を入手する方法の修正	8～14
手順１－３ 取組みの内容を決める	①３つのポイントを学ぶための手法の検討 ②開催日程、時間、場所の検討 ③その他	15～19

＜地域住民による勉強会＞

手順	概要	掲載頁
手順２－１ 取組みの目的を理解する	①主催者代表によるあいさつ ②災害・避難カードを作成する取組みの概要説明	20
手順２－２ 地域における災害リスクを知り、早めの避難の重要性を学ぶ	以下の内容より選択して実施します。 ①座学による講義 ②災害時のふりかえり（被災履歴がある場合） ③災害発生のケーススタディ ④自宅周辺の地図を用いた災害リスクの確認 ⑤まち歩き（地域に潜む危険を知る）	21～45
手順２－３ 災害の危険を回避するための情報を学ぶ	①資料を使った気象情報、警報の危険度分布、水位情報、避難情報の説明	46～53
手順２－４ 一人ひとりの避難の手順を学ぶ	①安全な避難場所と避難経路の検討 ②避難に必要な時間等の検討 ③安全に避難するためのタイミングを考える	54～61
手順２－５ 災害・避難カードを作る	①災害・避難カードの清書 ・手順２－２～４を踏まえ、参加者自らが清書	62～63
手順２－６ 地域内での普及・活用方法を考える	①普及・活用方法に関する意見交換 ・家族や地域に普及する方法や課題を議論	64～65

2. 主催者による事前準備

手順1－1　地域の特徴を知る

≪背景と目的≫

- ●前掲の「住民が学ぶ３つのポイント」に基づき一人ひとりが避難の手順を決めるためには、地域ごとの防災に関する取り決めや計画等が前提となります。
- ●被災履歴やハザードマップ、地域の防災に関する取組み、コミュニティの状況など、様々な情報を収集整理し、取組みのプログラムや一人ひとりの避難手順決定に反映します。
- ●地域の課題があれば当取組みのなかでも取り上げ、解決に努めます。

≪実施内容≫

①地域情報の収集整理

・近年の被災履歴や被害状況の収集、ハザードマップ、市町村史等より、地域に潜む水害や土砂災害の危険性を理解し、マップなど、取組みの資料に反映します。

・自治会や自主防災組織の体制、運用のルール、防災に関する地域の取決め、班や組などのまとまりを確認します。必要であれば修正し、避難手順に反映されるよう促します。

・地域コミュニティの活動状況（活動頻度、活動分野、参加状況、住民間や地域間の付き合いの深さ、等）を把握します。また、運動会や夏祭り、餅つきなどの恒例行事の開催状況を確認することで、地域イベントと併催する等、より参加しやすい取組の環境を考えます。

・その他、地域が抱える課題を話し合いの中で把握し、取組みの中で解決できるよう計画に反映します。

≪準備するもの≫

・開催地域の地図（白図：住宅地図程度の縮尺が望ましい）

・土砂災害や浸水害のハザードマップ

（市町村ホームページ（以下 HP）や県 HP「ぎふ山と川の危険箇所マップ」参照）

・災害履歴に関する記録や文献情報

（報道記録や市町村史など参照）

・自治会等の体制表や要綱・要領

・防災に関する取り決め資料

・イベントカレンダー

など

手順1－2　地域の災害･避難カードの様式を作る

≪目的≫

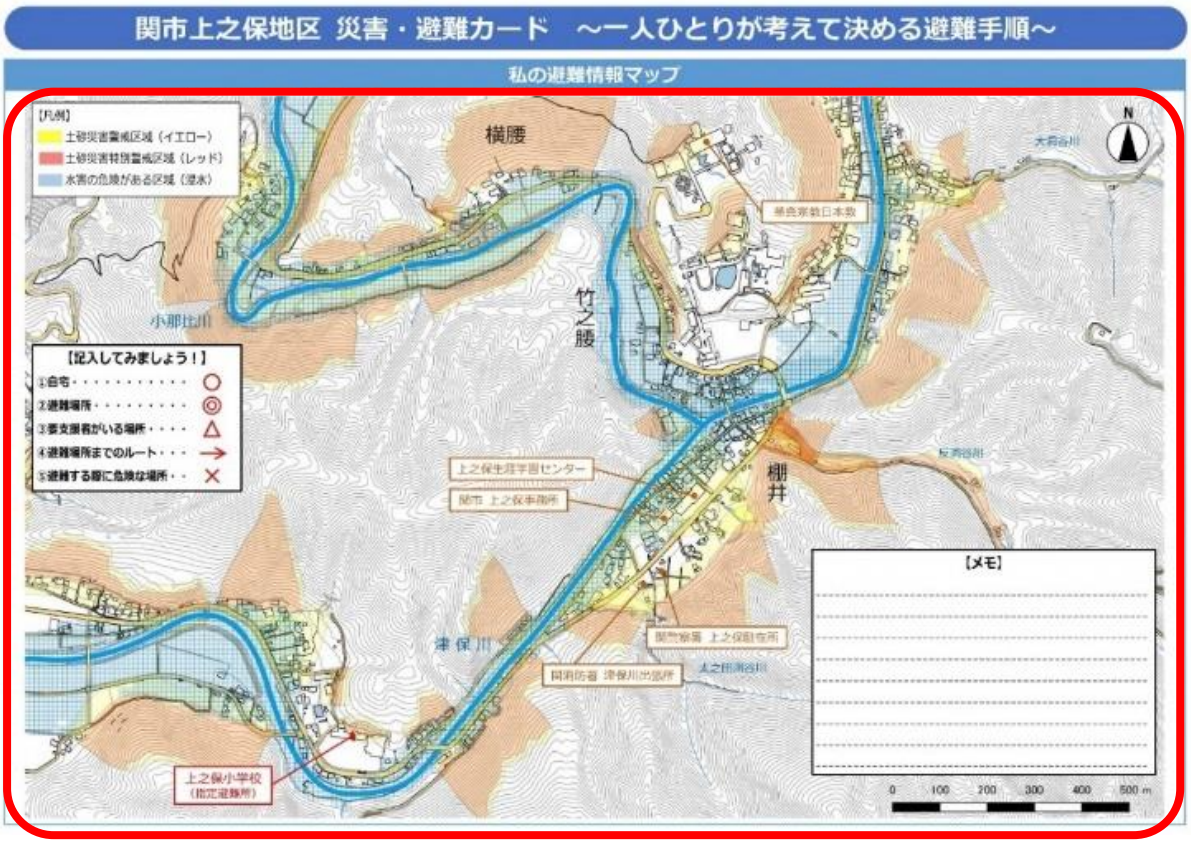
●本手引きの様式は県内で広く利用可能とするため一般化しています。
●参加者が深い学びを得やすいように、一般化した様式を地域の実情にあうように修正することが必要です。
●住民一人ひとりが考えやすいように災害・避難カードの様式を修正します。

≪実施内容≫

①ひな型ファイルの入手

●各地域で災害・避難カードを作成しやすいように、カードのひな型を準備しました。このひな型に、地域ごとの情報を一部入れ替えることで、その地域版のカードの様式を作ることができます。

岐阜県の HP から、災害・避難カードのひな型をダウンロードします。
該当ページの URL：
『http://www.pref.gifu.lg.jp/kurashi/bosai/bosai-taisaku/11115/saigaihinancards.html』
ファイル名「hinancard.doc」（Word ファイル）



当ファイルの内容です。以下に修正手順を示します。

②地図データ等の作成・更新

「私の避難情報マップ」の地図を、各地区の内容に差し替えます。

＜手順＞

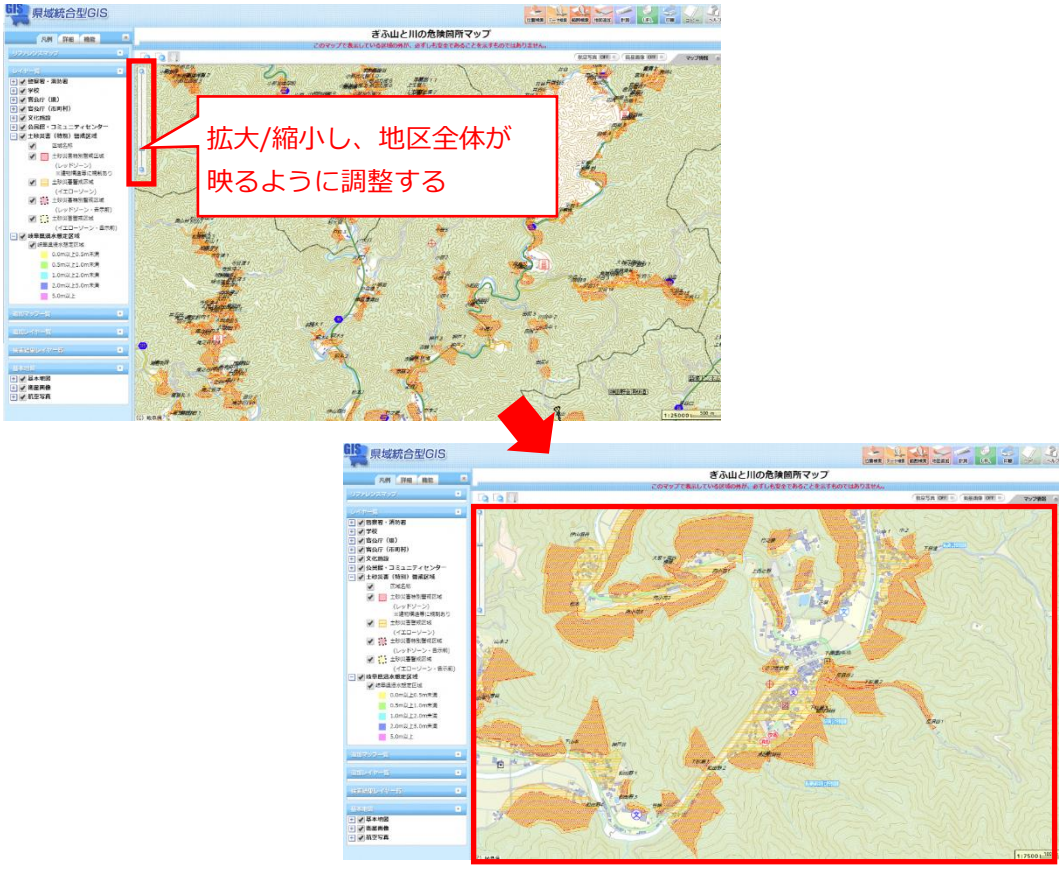
（１）岐阜県の HP から入手したひな形を準備します。

（２）インターネットの検索画面で「ぎふ山と川の危険箇所マップ」を入力して、「ぎふ山と川の危険箇所マップ」HP を開きます。

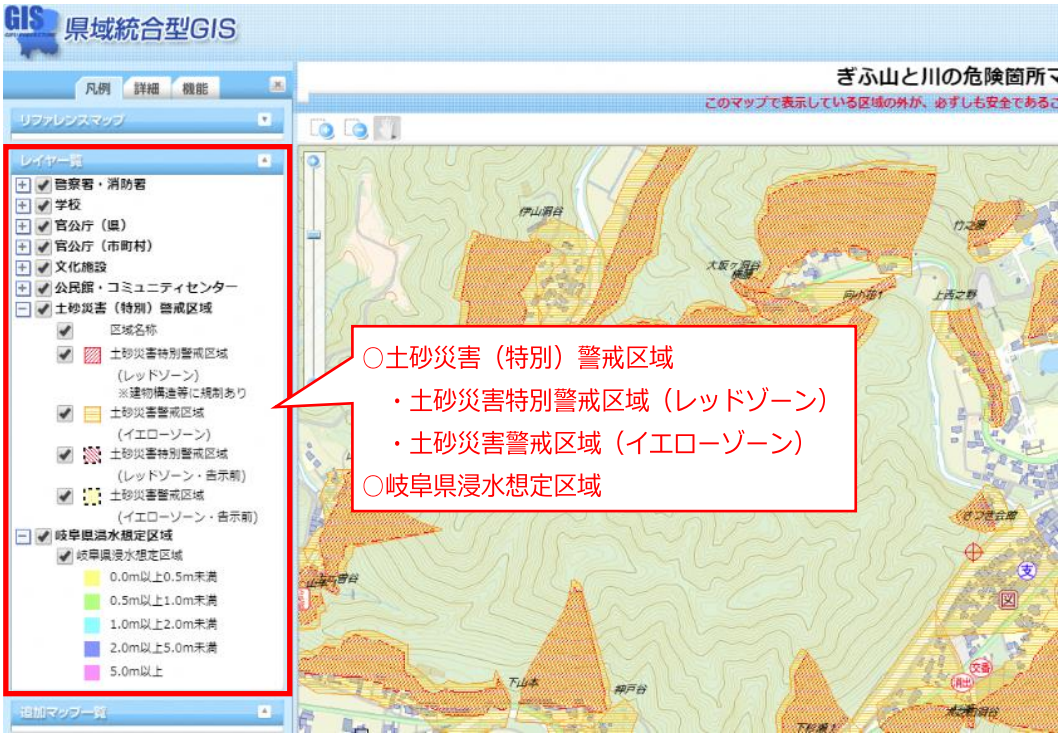
「ぎふ山と川の危険箇所マップ」⇒『http://kikenmap.gifugis.jp/』

（３）地区の郵便番号を入力し、「山と川の危険箇所」ボタンを押します。

（４）地区周辺の「山と川の危険箇所マップ」を開き、地区全体が映るように範囲を調整します（画像は関市上之保地区）。

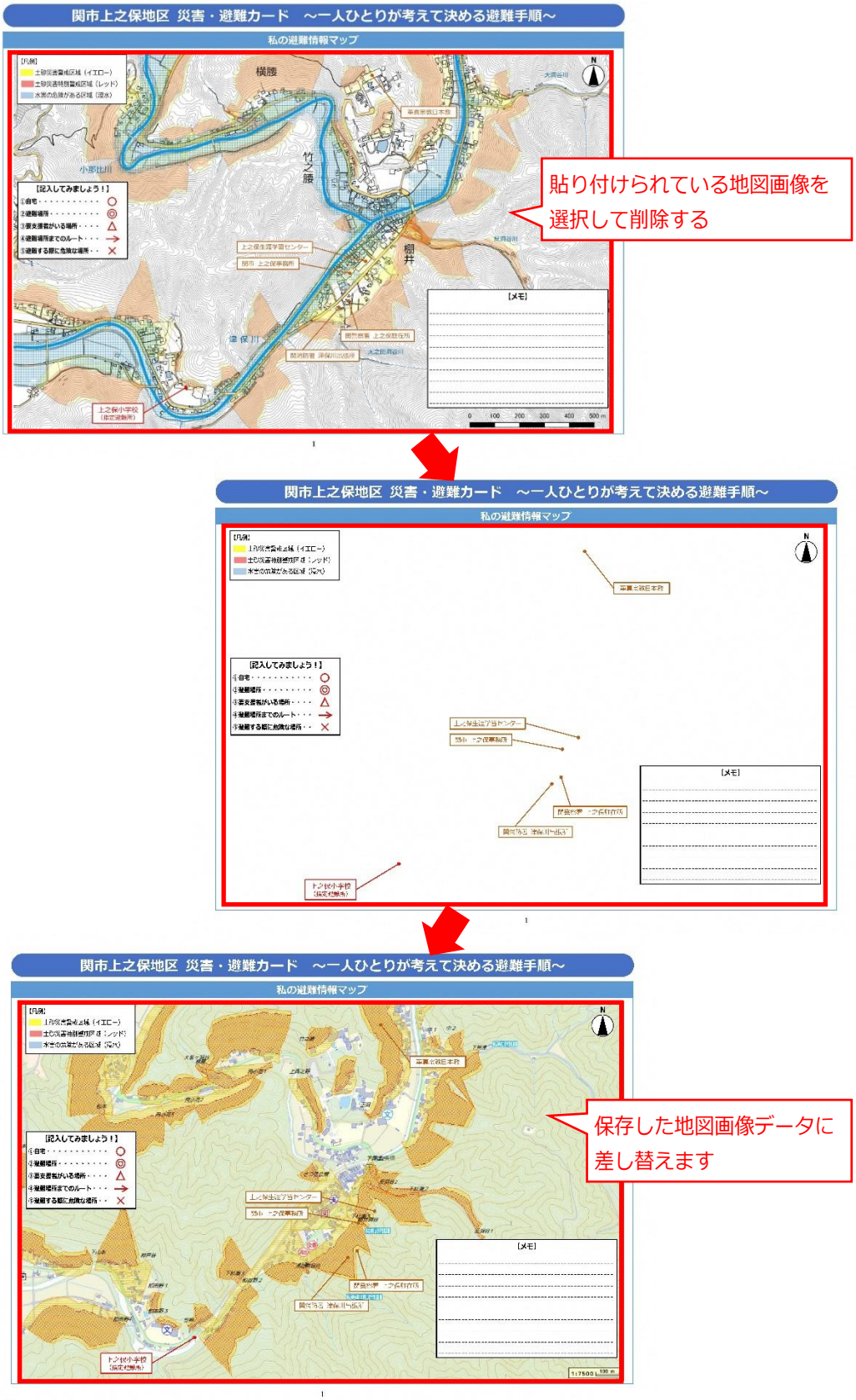


（５）設定した範囲を表示出来たら、左の「レイヤー一覧」で次の項目にチェック（✓）が入っているかを確認します。



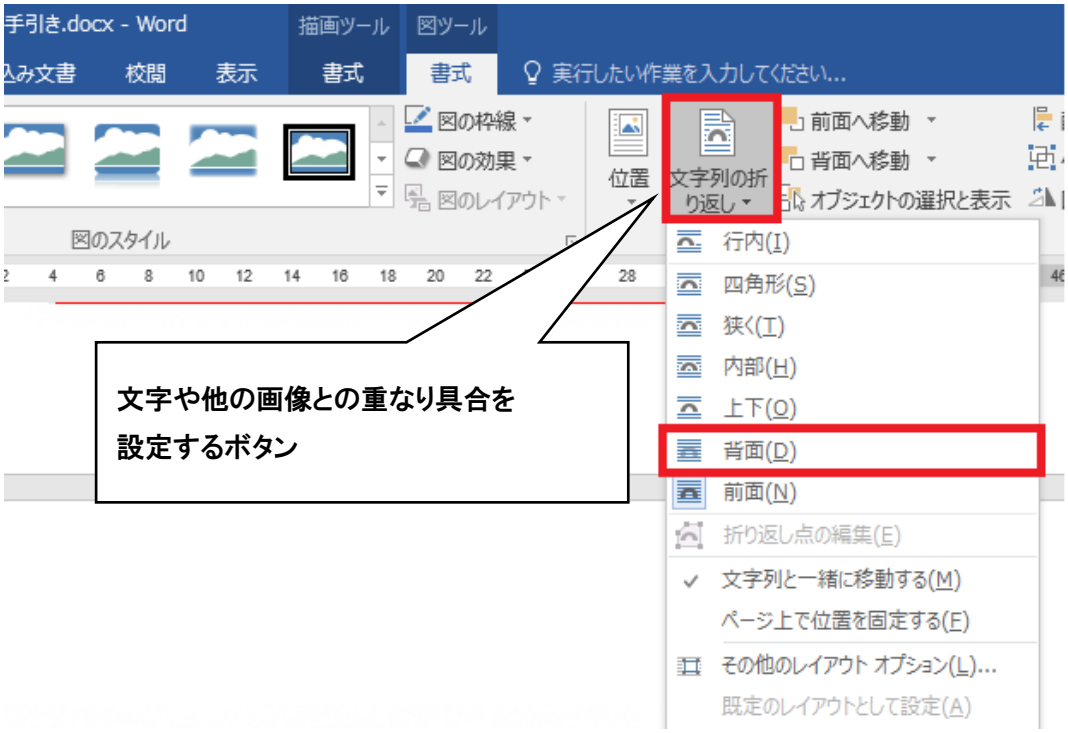
（６）設定した範囲を表示出来たら、右上の「コピー」アイコンを押して、画像データ（PNG データ）を保存します。

（７）岐阜県が作成した災害・避難カードの「私の避難情報マップ」について、貼り付けられている画像（ここでは関市上之保地区の地区図）を削除し、保存した画像データに差し替え、大きさを調整します。

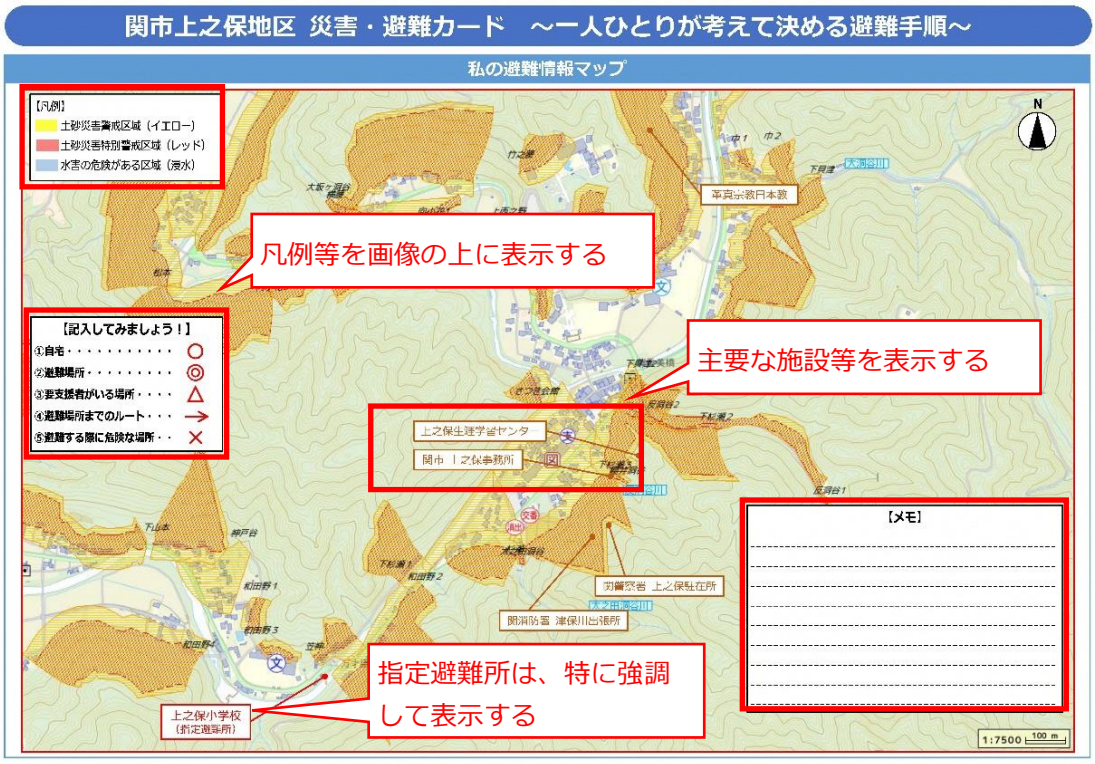


（８）凡例、吹き出し、コメントボックスなどを操作するために、差し替えた地図画像データに対して以下の手順を行います。

・ソフトのツールバー「図ツール　書式」を選び、地図データが背面に表示されるように設定する。



（９）凡例等を地図上に記して完成です。



③危険情報を入手する方法の修正

水位情報、避難情報及びその他の情報の入手先を、地域の内容に即して修正します。

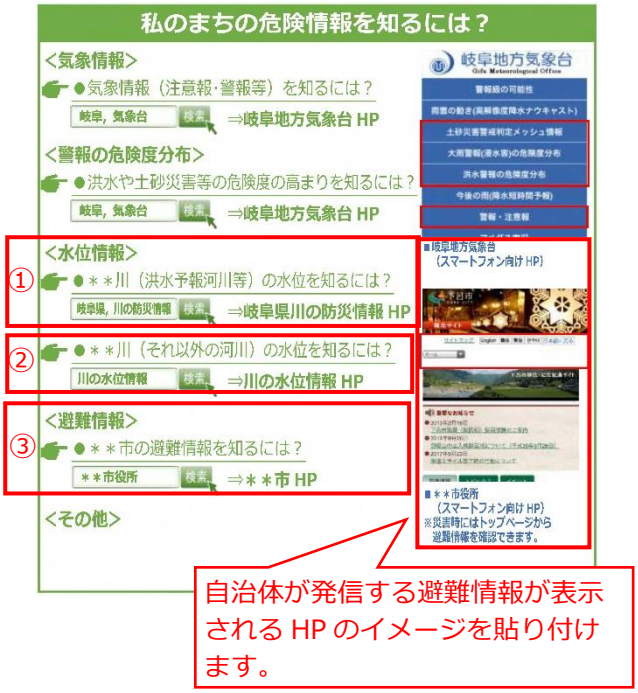
＜水位情報について＞

・「岐阜県川の防災情報」HP と「川の水位情報」HP から、地区を流れる河川名を確認します。また、その河川の氾濫に影響する上流部の河川名も確認します。

・「岐阜県川の防災情報」HP にて確認できる河川名があれば、①に記入します。

・「川の水位情報」HP にて確認できる河川名があれば、②に記入します。

・該当する河川が無ければ削除します。



自治体が発信する避難情報が表示される HP のイメージを貼り付けます。

＜避難情報について＞

・自治体が発信･提供している避難情報を取得できるホームページを確認し、③に名前を記載します。また、緊急時にどこに表示されるかを調べて、ホームページの画像を貼り付け、表示箇所を明示します。

・上記の情報以外に、特に注意すべき情報があれば、その内容と入手場所を＜その他＞に記載します。

＜確認するホームページ＞

・岐阜地方気象台	https://www.jma-net.go.jp/gifu/
・ぎふ山と川の危険箇所マップ	http://kikenmap.gifugis.jp/
・岐阜県川の防災情報	http://www.kasen.pref.gifu.lg.jp/
・川の水位情報	https://k.river.go.jp/
・自治体	個別に自治体 HP を検索してください

手順1－3　取組みの内容を決める

≪背景と目的≫

- ●一人ひとりが避難の手順を決める過程で、避難に関する意識を変えると共に、命の守り方を理解することが重要です。
- ●地域の状況に合わせて、3つのポイントを効果的に学ぶための手法とその組み合わせを選択し、取組みのプログラムを決定します。
- ●決定したプログラム内容に合わせて勉強会の回数、開催場所や時間を決めます。

≪実施内容≫

①3つのポイントを学ぶための手法の検討

・地域の状況に合わせて、３つのポイントを学ぶための手法を決定します。

・手法の効果的な組み合わせを検討し、取組の回数、時間を決め、各回のプログラム（内容と時間割）を検討します。

・手順２－２「地域における災害リスクを知り、早めの避難の重要性を学ぶ」では、実施可能な時間や、地域の状況などに従い、５つの手法（P.21～45 参照）から選択します。

・P.17 に「取組のプログラム内容の例」を示しますので参考にしてください。

②開催日程、時間、場所の検討

・参加者が集まりやすい曜日、時間を想定し日程を決定します。もともと設定されていた地域の会合やイベントなどに合わせて開催することも考えられます。

・開催場所を決めます。参加者の想定人数に応じた広さの会議室等で、参加者が集まりやすい場所であることや、駐車場が十分に確保できるかなどを考慮します。

・ワークショップを行うことを想定し、参加人数に対応した活動しやすい広さであることや、テーブルや椅子などの備品が用意できることも重要です。

・参加者への案内の作成、周知の方法を検討します。

③その他

・あいさつ、司会進行、会場設営、資料作成等の担当者を決めます。

・参加者配布資料、模造紙など、資料等の準備を進める担当者を決めます。

・プログラムの内容に応じて、防災に係る行政機関や学識者等への依頼を行います。

・回覧板やチラシ、会合などを利用して、参加者への周知を行います。

≪準備するもの≫

・開催地域の地図（白図）

・ハザードマップ

・地域の防災活動の組織図、名簿

・地域の活動(自治会活動、防災活動、学校との連携行事、祭、地区清掃、サロン、学習会、交流会など)のスケジュールが確認できるもの、あるいは公民館や体育館の利用実績

など

【参考】取組のプログラム内容の例

1回コース（3．0時間×1回）

● １回の勉強会でカードを作成する例です。地域組織の会合や、イベントに合わせて実施するなど、様々な機会を活用することが考えられます。

	手順	内容	時間	掲載頁
第１回	**手順２－１** 取組みの目的を理解する	①主催者代表によるあいさつ ②災害・避難カードを作成する取組みの概要説明	１５分	20
	手順２－２ 地域における災害リスクを知り、早めの避難の重要性を学ぶ	④自宅周辺の地図を用いた災害リスクの確認	５０分	35~38
	手順２－３ 災害の危険を回避するための情報を学ぶ	①資料を使った気象情報、警報の危険度分布、水位情報、避難情報の説明	２５分	46~53
	手順２－４ 一人ひとりの避難の手順を学ぶ	①安全な避難場所と避難経路の検討 ②避難に必要な時間等の検討 ③安全に避難するためのタイミングを考える	６０分	54~61
	手順２－５ 災害・避難カードを作る	①災害・避難カードの清書	１０分	62~63
	手順２－６ 地域内での普及・活用方法を考える	①普及・活用方法に関する意見交換	２０分	64~65

2回コース（2．5時間×2回）

● ２回の勉強会でカードを作成する例です。１回目で学んだことを２回目までの間で、家族や地域で話し合ったり、新たな意識を持って地域を見直す効果が期待できます。

	手順	内容	時間	掲載頁
第１回	**手順２－１** 取組みの目的を理解する	①主催者代表によるあいさつ ②災害・避難カードを作成する取組みの概要説明	２０分	20
	手順２－２ 地域における災害リスクを知り、早めの避難の重要性を学ぶ	【いずれかを選択】 ①座学による講義 ②災害時のふり返り（被災履歴がある場合） ③災害発生のケーススタディ	６０分	21~34
	手順２－２ 地域における災害リスクを知り、早めの避難の重要性を学ぶ	④自宅周辺の地図を用いた災害リスクの確認	６５分	35~38
		２回目の概要説明等	５分	
第２回		１回目のふり返り等	１５分	
	手順２－３ 災害の危険を回避するための情報を学ぶ	①資料を使った気象情報、警報の危険度分布、水位情報、避難情報の説明	３５分	46~53
	手順２－４ 一人ひとりの避難の手順を学ぶ	①安全な避難場所と避難経路の検討 ②避難に必要な時間等の検討 ③安全に避難するためのタイミングを考える	６０分	54~61
	手順２－５ 災害・避難カードを作る	①災害・避難カードの清書	１０分	62~63
	手順２－６ 地域内での普及・活用方法を考える	①普及・活用方法に関する意見交換	３０分	64~65

3回コース（2．5時間×3回）

● ３回の勉強会でカードを作成する例です。１回目に学んだことをもとに、２回目に「まち歩き」を実施することで、地域の状況を自分の目で具体的に確認することができます。１、２回目で学んだことを家族や地域で話し合い、それをもとに３回目に災害・避難カードを作成することができます。

	手順	内容	時間	掲載頁
第１回	**手順２－１** 取組みの目的を理解する	①主催者代表によるあいさつ ②災害・避難カードを作成する取組みの概要説明	２０分	20
	手順２－２ 地域における災害リスクを知り、早めの避難の重要性を学ぶ	①座学による講義	６０分	21~22
	手順２－２ 地域における災害リスクを知り、早めの避難の重要性を学ぶ	【いずれかを選択】 ②災害時のふり返り（被災履歴がある場合） ③災害発生のケーススタディ	６５分	23~34
		２回目の概要説明等	５分	
第２回		１日目のふり返り等	１５分	
	手順２－２ 地域における災害リスクを知り、早めの避難の重要性を学ぶ	⑤まち歩き（地域に潜む危険を知る）	１３０分	39~45
		３回目の概要説明等	５分	
第３回		１、２回日目のふりかえり等	１５分	
	手順２－３ 災害の危険を回避するための情報を学ぶ	①資料を使った気象情報、警報の危険度分布、水位情報、避難情報の説明	３５分	46~53
	手順２－４ 一人ひとりの避難の手順を学ぶ	①安全な避難場所と避難経路の検討 ②避難に必要な時間等の検討 ③安全に避難するためのタイミングを考える	６０分	54~61
	手順２－５ 災害・避難カードを作る	①災害・避難カードの清書	１０分	62~63
	手順２－６ 地域内での普及・活用方法を考える	①普及・活用方法に関する意見交換	３０分	64~65

3. 地域住民による勉強会

手順2－1　取組みの目的を理解する

≪背景と目的≫

●避難に関する意識を変えると共に、命の守り方を理解してもらうため、一連の取り組みの概要と目的を説明します。 ●住民一人ひとりが避難の当事者であること、自分の身は自分で守るべきであること等、取組の趣旨を理解してもらいます。

≪実施内容≫

①主催者代表によるあいさつ・・・・5分程度

・自治会長や自主防災会の代表、自治体担当者などが、地域の課題にふれ、ともに考えていけるように挨拶の中で呼びかけます。

②災害・避難カードを作成する取組みの概要説明・・・・10分程度

・災害・避難カード作成までの手順と、日程について説明を行います。

・災害・避難カードを作成する以下の取組趣旨を理解してもらいます。

１）行政は、避難情報を適切に出せるよう努力しているが、限界があること。

２）避難行動の主体は住民であり、住民一人ひとりが避難の手順について考えることが、重要であること。

・その他、本取組みを行う理由がある場合は、説明します。

⇒資料は、参考資料「モデル事業の実施事例　資料2　本日の勉強会について」参照（P.76～88）

手順2－2　地域における災害リスクを知り、早めの避難の重要性を学ぶ

≪背景と目的≫

●地域において、過去にどのような災害が起きているのか、大雨の時に、浸水や土砂災害が発生する可能性の有無、可能性の高い場所を知ることが重要です。
●その上で、災害に遭う前に早めの避難が重要であることを学びます。
●被災履歴がある地域では、被災時にどのようなことが起きていたかをふりかえり、避難のポイントや警戒すべき現象を学びます。
●ハザードマップ等を用いて、大雨に関してどのような災害リスクがあるのかを学びます。
●大雨の中で避難する際に想定される危険性を認識し、早めの避難が必要であることを学びます。

≪実施内容≫

①座学による講義･･･60分程度

＜ねらい＞

●地域における災害のリスクや、必要な情報の入手による早めの避難行動を取ることの重要性について、講師を招いて講義を開催します。

＜手順＞

●講師の選定

・座学の講師には、下記の項目について精通していることが望まれます。

〔必須〕
・ハザードマップの入手方法
・ハザードマップから得られる情報の意味合い
（レッドゾーン、イエローゾーン、浸水想定区域についてそれぞれが想定している災害現象や特徴、被害規模、発生確率、想定する現象など）
・ハザードマップの適用範囲（想定外の事象、問題）
・自主的な避難行動の重要性
・避難行動の一連の手順
・指定緊急避難場所、指定避難所、自主避難所の定義と用途・使い分け
・避難所の開設手順
・避難所に必要な要件(想定する災害に対する安全性、居住性、収容能力など)

〔可能な限り〕

・市町村や消防・警察など、公的機関による避難誘導とその限界ならびに自分の身は自分で守る必要性

・台風や積乱雲、線状降水帯の発生メカニズムなど（気象学など）

・水害の特徴、メカニズム、対策など（水理学・河川工学など）

・土砂災害の特徴、メカニズム、対策など（地質学、地盤工学、砂防工学など）

・防災、気象、避難に関する法律

・気象情報・避難情報(防災事業のソフト対策)の特徴と限界

・治山治水事業(防災事業のハード対策)の特徴と限界

●話す内容のポイント

・講義の内容としては、以下のポイントを押さえる必要があります。

・避難の必要性

・自宅や外出先、避難途中で被災するシナリオ

・避難失敗のシナリオ・特徴

・避難成功に必要な条件

・避難先に求められる要件

・避難に必要な気象情報・避難情報の特徴と限界、入手方法、使い方など

・避難完了までの一連の手順と所要時間(個人編、地域編、要支援者支援編)

・避難訓練の方法と注意点など

②災害時のふり返り(被災履歴がある場合)･･･50～60分程度

＜ねらい＞

●被災地域では、避難に関する情報が数多く発表されていたにもかかわらず、多くの方が避難開始の判断ができず、水や流出土砂で覆われている道路を通って脱出したり、自宅内での垂直避難を余儀なくされています。

●近年被災したことのある地域では、被災当時、状況が悪化していくなかで自分がとった行動を振り返っていただき、気象や避難に関する各種情報を収集し、災害から身を守るために使いこなしていたかを自己評価します。

●これらの振り返りをとおして、早めに避難を判断し、行動することの重要性を学びます。

＜手順＞

●近年起きた災害における具体的な被害状況を客観的にふりかえり、当時のひっ迫した状況を再現します。

（１）災害時のふり返り

①水害や土砂災害など、発生した事象のふり返り

②自分が取った行動のふり返り

（２）避難できたかどうかのふり返り

③いつ避難したのかや避難の成否の確認

（３）長い時間軸で見た避難行動（長雨の場合）

④災害発生時に行った判断や行動と当時の気象情報や避難情報との時間的前後関係の確認

（４）取ると良かったと思う避難行動の気付き

⑤避難するなかで気づいたこと

⑥望ましい判断・行動とタイミング

（５）意見交換

⑦意見交換

＜準備するもの＞

使い方	準備するもの	規格	数量	備考
テーブル配布	地区全体図	A1	5 枚	資料作成方法参照
	短期タイムライン	A1	5 枚	資料作成方法参照
	長期タイムライン	A1 張り合せ	1 枚	資料作成方法参照
	模造紙	A1	5 枚	
	付箋①（3 色）	75×75mm	適量	
	付箋②（2 色）	75×25mm	適量	
	ボールペン	－	人数分	
	サインペン			
	カラーマーカー	－	各テーブル分	

※参加者 30 名（6 名×5 グループを想定）

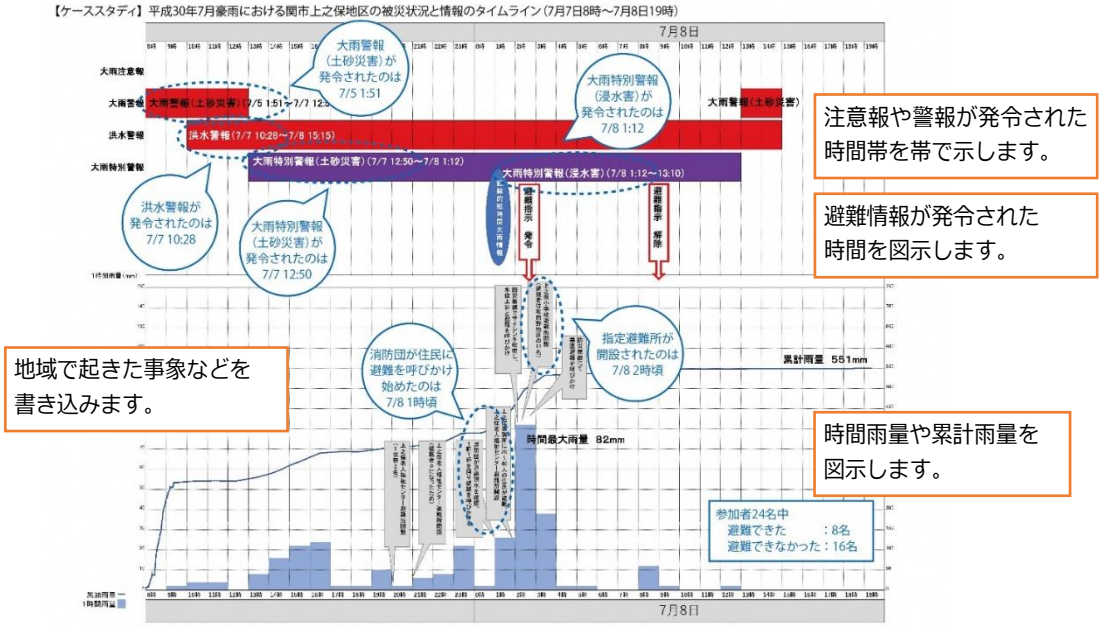
＜資料作成方法＞

【地区全体図】

●本手引きの P.8「手順１－２　地域の災害･避難カードの様式を作る」を参考に、地区全体図を作成します。

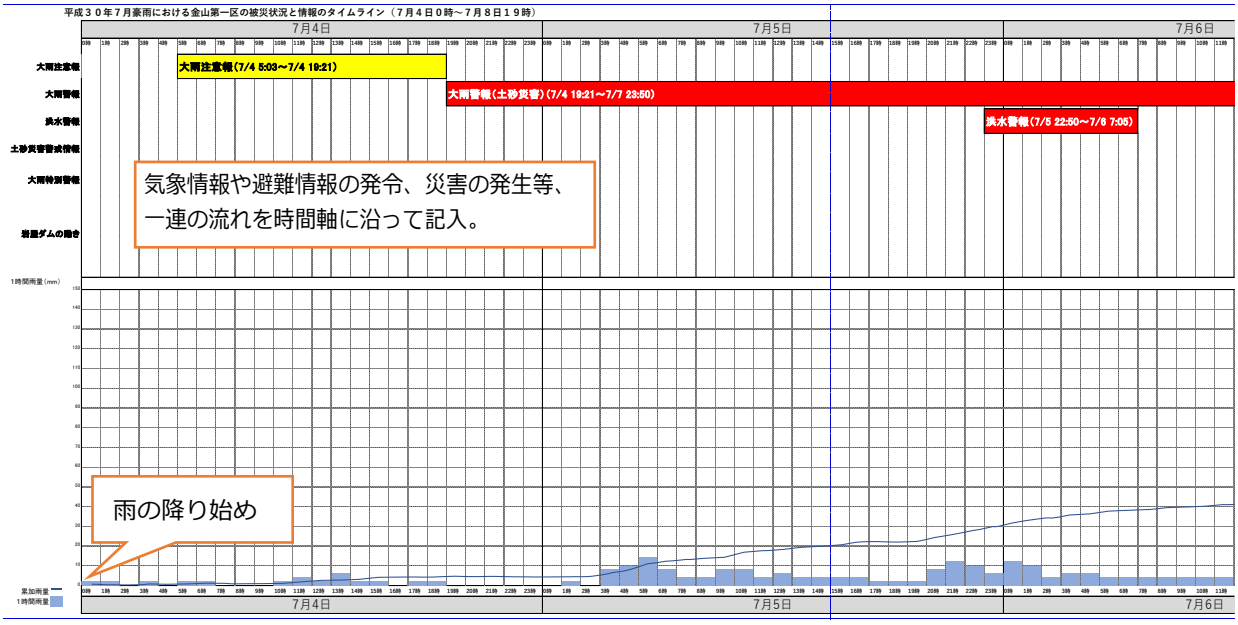
【短期タイムライン】

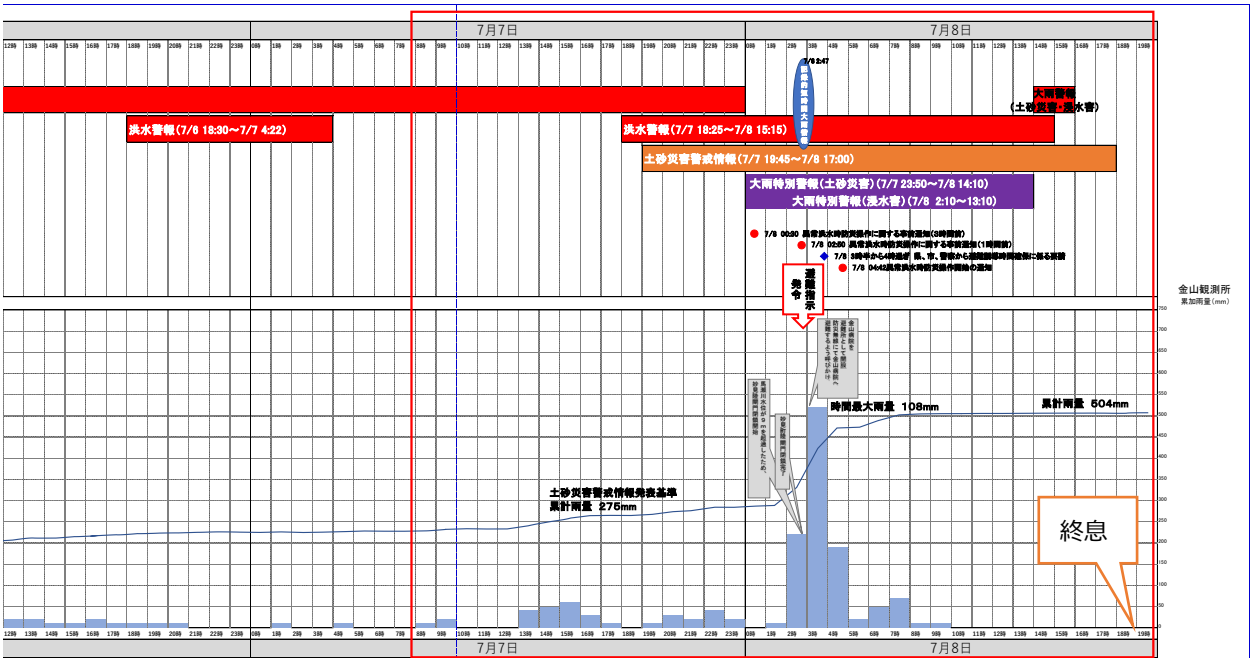
●下のイメージを参考に、災害の危険性が最も高まった時間帯を抜き出し、注意報や警報の発令状況、時間雨量及び累積雨量、地域で起きた事象をまとめましょう。



【長期タイムライン】

●下のイメージを参考に、一連の降雨の始まりや大雨が予測される情報が現れ始めた時点から、災害の危険性が最も高まった時間帯を経て終息するまでの間で、注意報や警報等、気象情報や避難情報の発令、時間雨量及び累積雨量、発生した災害の事象等を時間軸に沿ってまとめましょう。



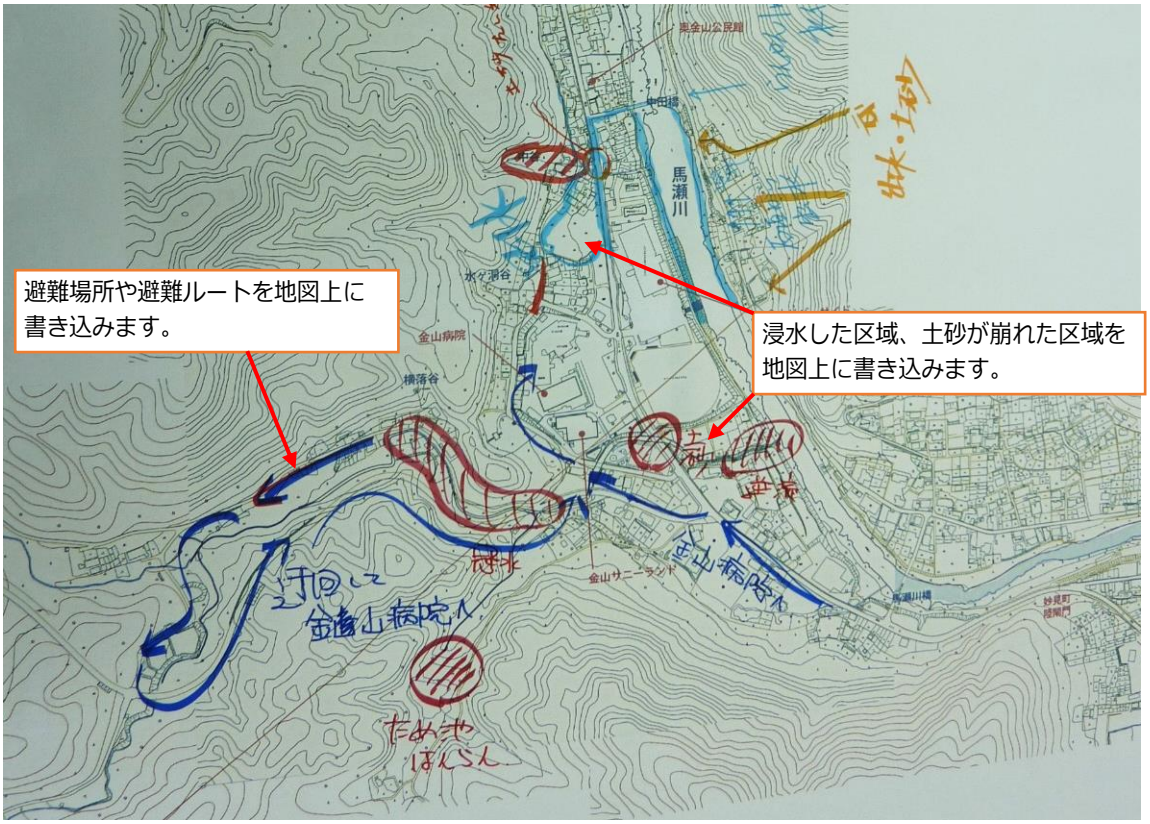


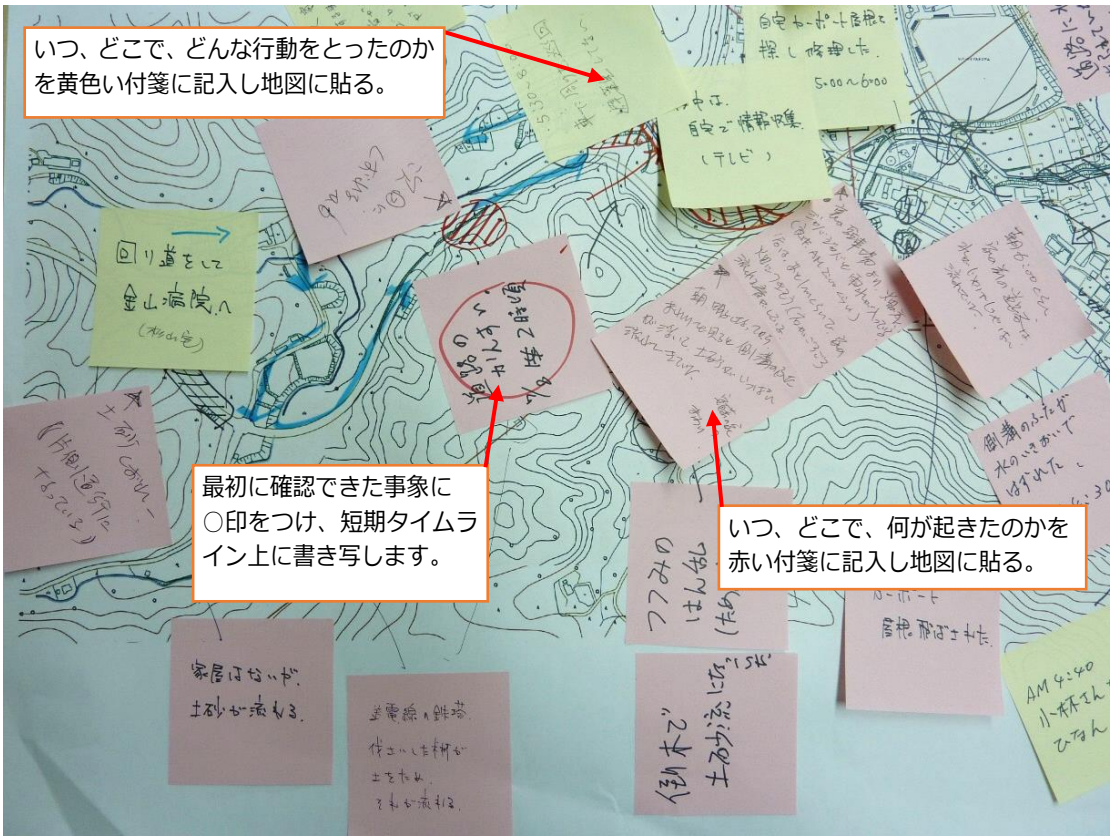
この部分が短期タイムラインになります。

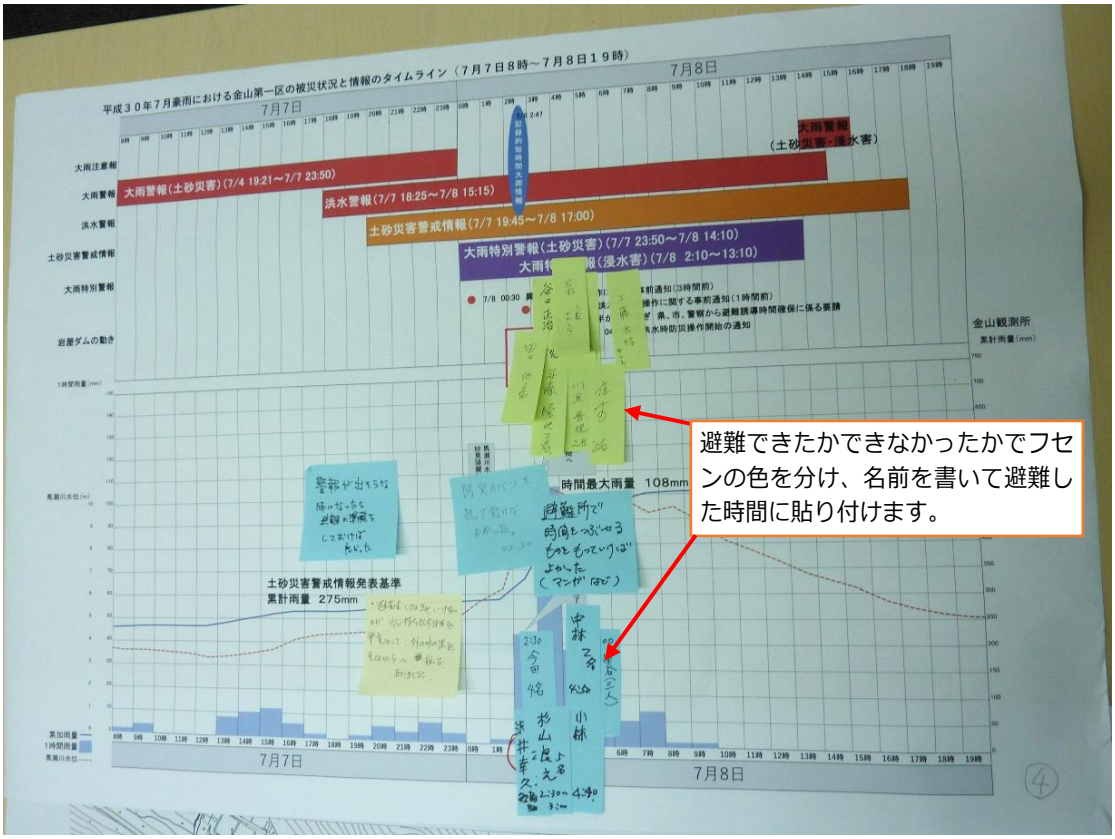
<進行イメージ>

進行	内容	備考
(1)災害時のふり返り	①発生した事象のふり返り ・災害発生時を思い出し、いつ、どこで、どういった事象が発生したかを、赤い付箋に書く（自分が確認した事象を記入） ・書いた付箋を地区全体図に貼る ・浸水したエリア、土砂が流れてきたエリアなど、発生した事象が広範囲に及ぶ場合は、マジックで地図上に書き込む **<ポイント>** ・災害発生時、どこに、誰といたのか ・浸水や土砂流出の状況はどうだったか ・建物や車など、被害の状況はどうだったか ・その際、時間も一緒に思い出してみましょう ②取った行動のふり返り ・災害が発生するなか、自身がいつ、どこで、どんな行動を取ったのかを、黄色い付箋に書く ・書き出した付箋を模造紙に貼る **<ポイント>** ・何時何分に、どこへ避難（水平避難か垂直避難か）したかを思い出してみましょう ・その時、身の危険を感じたかどうかを思い出してみましょう	①②で使う付箋は書き出しやすいよう 75×75mm が良い。また、発生／確認した事象と取った行動で付箋の色を変えておくと整理しやすい <①の例> 7月8日　23:10 家の前の道に土砂が流出していた <②の例> 7月8日　23:50 ●●小学校体育館へ子ども2人と避難した
(2)避難できたかどうかのふり返り	③一番最初に発生した事象の確認 ・①で書き出した付箋を見直し、一番最初に確認された事象の付箋に○印をつける ・○印をつけた付箋の内容を、短期タイムライン上の該当する時間に書き写す **<ポイント>** ・災害と認識できる事象がいつ始まっていたのかを短期タイムライン上で明らかにします。 ④いつ避難したのかや避難の成否の確認 ・短期タイムライン上で避難行動をとった時間に付箋を貼る ・避難できた、できなかったで付箋の色を分け、名前を書いてタイムラインに貼り出す **<ポイント>** ・安全な避難ができていたか、危機一髪の脱出になっていなかったかを考えてみましょう	使用する付箋は 75×25mm が良い。複数の参加者の行動が短い時間に集中すると考えられるため

(3)長い時間軸で見た避難行動（長雨の場合）	⑤長い時間軸で見た避難行動（長雨の場合） ・短期タイムラインが長期タイムラインのほんの一部であることを示す。 ・気象情報や避難情報が前々から出されていることを確認する。 **<ポイント>** ・各種情報に関心を持ったのかどうか。なぜ早めに避難行動をとらなかったのか考えましょう。	付箋は①②と違う色にすると整理しやすい
(4)取ると良かったと思う避難行動の気付き	⑥取ると良かったと思う避難行動の気付き ・当時、なぜ自分がその行動をとったのか、どう行動すれば良かったのかの気付きを付箋に書く ・書いた付箋を地図上に貼る **<ポイント>** ・他の参加者の行動も見て、どういう行動を取ると良かったか、考えてみましょう	
(5)意見交換	⑦意見交換 ・参加者が多く、いくつかのグループに分かれて実施した場合は、各グループでどういった話し合いがされたか、意見交換を行う **<ポイント>** ・各グループ間で意見や気付きを共有しましょう	意見交換の方法は、グループ毎に発表する形式でも良いし、各グループに代表者が残り、それ以外の人は他のグループを見に行き、各グループに残った代表者が内容を説明する形式でも良い




いつ、どこで、どんな行動をとったのか
を黄色い付箋に記入し地図に貼る。
最初に確認できた事象に
○印をつけ、短期タイムライン上に書き写します。
いつ、どこで、何が起きたのかを
赤い付箋に記入し地図に貼る。


平成３０年７月豪雨における金山第一区の被災状況と情報のタイムライン（７月７日８時～７月８日１９時）
7月7日
7月8日
大雨警報（土砂災害）(7/4 19:21～7/7 23:50)
洪水警報（7/7 18:25～7/8 15:15）
土砂災害警戒情報（7/7 19:45～7/8 17:00）
大雨特別警報（土砂災害）(7/7 23:50～7/8 14:10)
大雨特別警報（浸水害）(7/8 2:10～13:10)
時間最大雨量 108mm
土砂災害警戒情報発表基準
累計雨量 275mm
避難できたかできなかったかでフセンの色を分け、名前を書いて避難した時間に貼り付けます。

③ 災害発生のケーススタディ･･･60分程度

＜ねらい＞

●近年被災したことのない地域では、自らの経験のもと、早めの避難や事前の備えの重要性を理解することができません。

●そのため、モデル事業をとおして整理した事例をもとに、災害の危険を回避するための避難情報・防災情報の発表状況（内容・タイミングなど）、警戒が必要な災害の兆候、望ましい住民の判断と行動（内容・タイミングなど）等を確認し、災害があった地域と同様に、早目の避難の必要性と具体的手順を学びます。

＜手順＞

（１）災害発生後となってしまった避難行動

↓

大雨特別警報が発令され、短時間で大雨が降り災害が発生するなかで、住民が取った避難事例を時間軸に沿って確認し、自分ならどう行動したか考える。

（２）早めの避難行動を取るためには

↓

災害が発生し住民が避難行動を取る何日も前から気象、避難など各種情報が発令されていたことを見てどうしたら良かったのか考える。

（３）意見交換

実際の住民の気づきと自分たちの気づきを比べて共有する。

※モデル事業（関市上之保地区及び下呂市金山地区）の例では、災害発生後の避難となった結果、避難行動自体が困難となったケースを取り上げています。

＜準備するもの＞

使い方	準備するもの	規格	数量	備考
テーブル配布	短期タイムライン	A1	5 枚	県 HP より入手
	付箋	75×75mm	適量	
	筆記具	–	適量	
会場掲示	長期タイムライン	A0	1 枚	県 HP より入手

※参加者 30 名（6 名×5 グループを想定）

＜資料入手方法＞

【短期タイムライン、長期タイムライン】

●関市及び下呂市をモデルに作成した短期タイムラインと長期タイムラインを準備しましたので、いずれかを選択し使用してください。

「関市上之保地区」…浸水害が発生するなか避難した地域（P.32 参照）

「下呂市金山地区」…土砂災害が発生するなか避難した地域（P.33 参照）

●岐阜県の HP から、短期タイムライン、長期タイムラインをダウンロードします。

該当ページの URL：

『http://www.pref.gifu.lg.jp/kurashi/bosai/bosai-taisaku/11115/saigaihinancards.html』

関市版……ファイル名「studyseki-short.pdf」（短期タイムライン）

「studyseki-long.pdf」（長期タイムライン）

下呂市版…ファイル名「studygero-short.pdf」（短期タイムライン）

「studygero-long.pdf」（長期タイムライン）

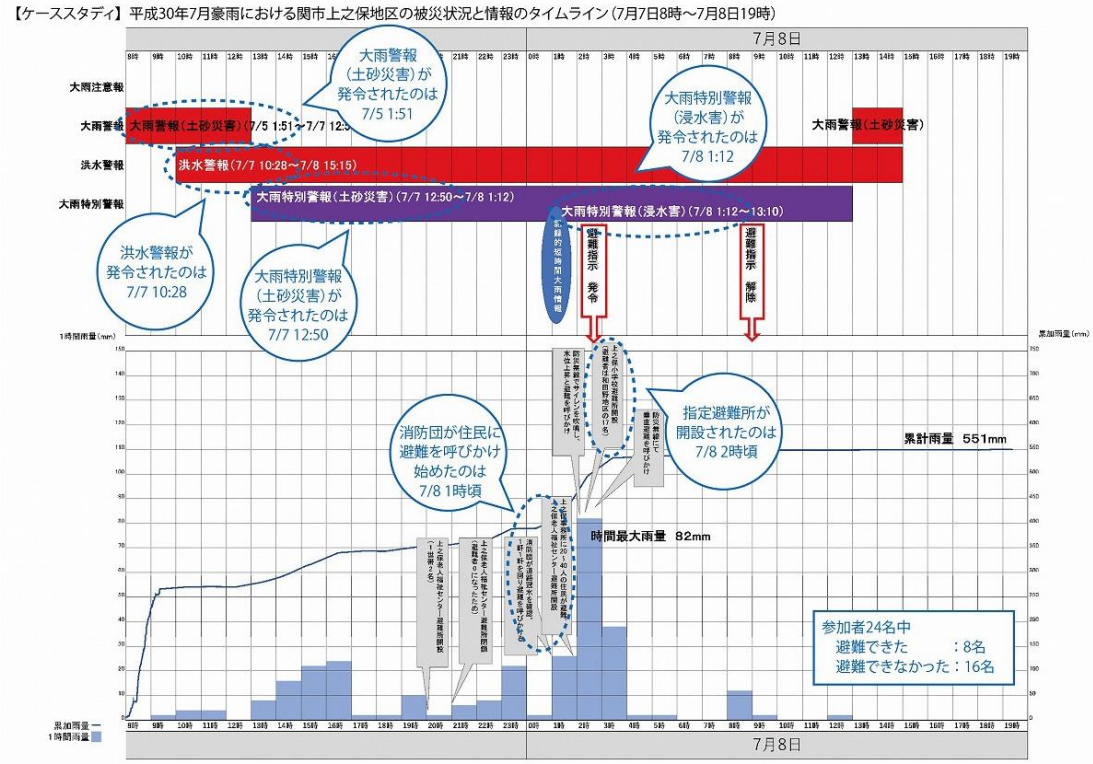
＜進行イメージ＞

進行	内容	備考
(1)災害発生後となってしまった避難行動	①気象情報発令のタイミングや降雨状況の確認 ・短期タイムラインを見ながら、時間雨量や累計雨量、気象情報の発令された時期を確認する ②避難指示の発令、指定避難所の開設のタイミングの確認 ・短期タイムラインを見ながら、自治体から避難指示が発令された時期、指定避難所が開設された時期を確認する **＜ポイント＞** ・いつ避難指示が出たのか、いつ避難所が開設されたのか、吹き出しを見て確認しましょう ③災害の事象が発生した状況等の確認 ・陸閘の閉鎖、消防団や自治会の声掛けなどの行動、災害の事象発生などを時間に沿って確認する	自治体や住民が避難行動を取り始めたタイミングでは、既に危険な状況にあったことを参加者に知ってもらう また、上記タイミングが深夜であったことに気づいてもらい、安全に避難するためにはいつ頃に避難すべきかを考えてもらう

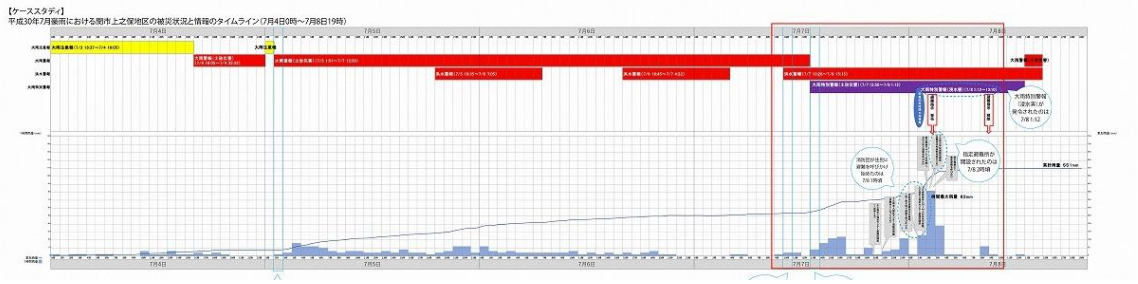
	④住民の避難行動や災害が発生したタイミングの確認 ・気象や避難など各種情報が出され、大雨が降り、災害が発生するなか、住民がどのようなタイミングで避難したのか確認する。 ・また、どれだけの人が避難できなかったのかを確認し、避難の困難度合いを計る。 **<ポイント>** ・住民はいつ避難所へ避難したのか、その時、どんな気象情報が発令されていて、雨はどんな降り方をしていたのか確認しましょう	
(2)早めの避難行動をとるためには	⑤気象情報の発令タイミングの確認 ・長期タイムラインを見ながら、災害の危険を回避するために重要な気象情報がいつの段階から発令されていたのかを確認する。 ・避難のタイミングが良かったのかどうか、自分なら、いつ何をきっかけにどのように避難するのか考える。 ・考えを付箋に書き、短期タイムラインに貼る。 **<ポイント>** ・長期タイムラインを見て、気象情報がいつから発令されていたか確認しましょう ・もっと早くに避難することができなかったか、話し合ってみましょう	かなり早い時点から様々な情報を入手することができたこと、避難行動を開始するきっかけが多くあったことを理解してもらう
(3)意見交換	⑥意見交換 ・各グループでどういった話し合いがされたか、意見交換を行う ・避難した関市及び下呂市の住民の気付きを紹介し、参加者間で共有する **<ポイント>** ・各グループでの話し合いの内容を確認し、参加者の気づきを共有しましょう ・モデル事業の参加者意見を紹介し、自分達の意見と比較することで、気づきを共有しましょう	

関市上之保地区

＜短期タイムライン＞



＜長期タイムライン＞



※関市上之保地区のケーススタディにおける説明ポイント

・災害が発生する４日前から大雨警報が、前日の 12:50 には大雨特別警報が発令されていた。午前 2 時に時間最大 82mm の大雨が降った。

・津保川が氾濫し、家屋が浸水被害を受けた。道路が川と化し、避難が困難な状況になった。「避難」ではなく「脱出」という状況であった。

・深夜、猛烈な雨が降るなか、自治会や消防団が各戸に避難を呼びかけた。

・住民が避難したのは土砂災害警戒区域内にある老人福祉センターだった。

・指定避難所は、地区から１ｋm近く離れた上之保小学校であったが、道路が冠水しており、たどり着ける状態ではなかった。

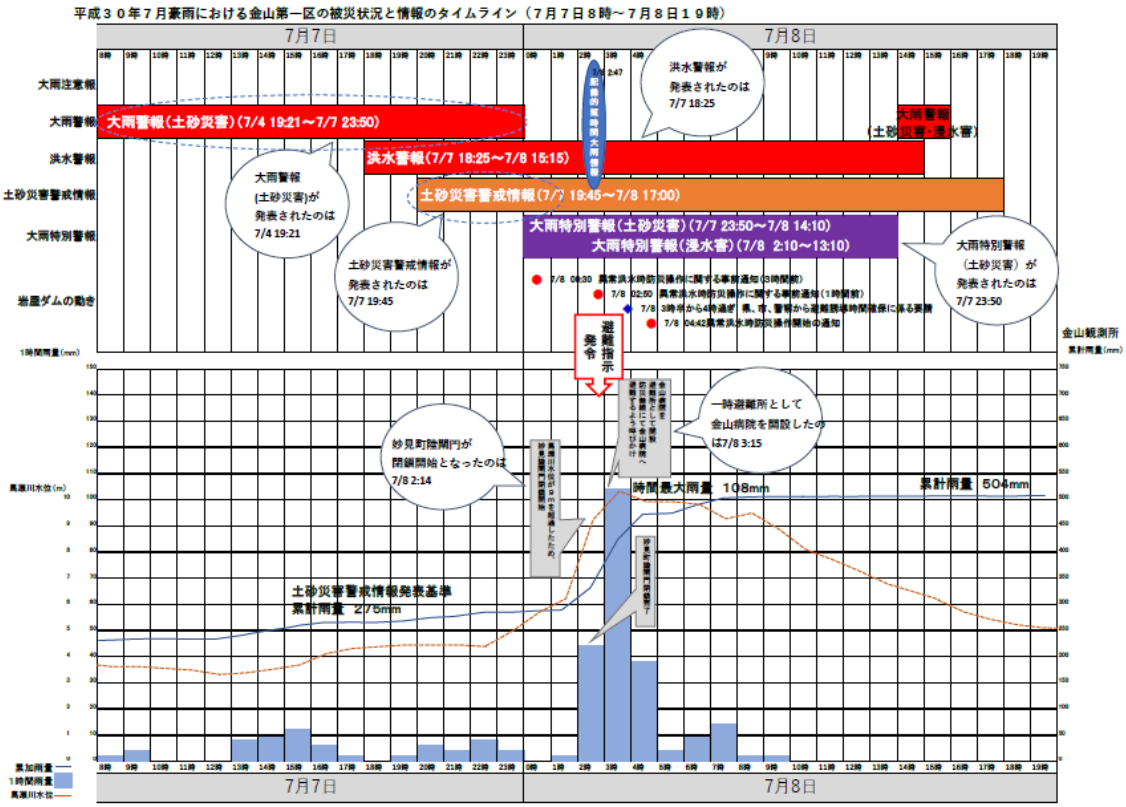
・いつ、何をタイミングにどこに避難すべきだったか、事前にどのような準備をすべきだったのかを考えてもらう。

例：明るいうちに、指定避難所である上之保小学校に避難する。

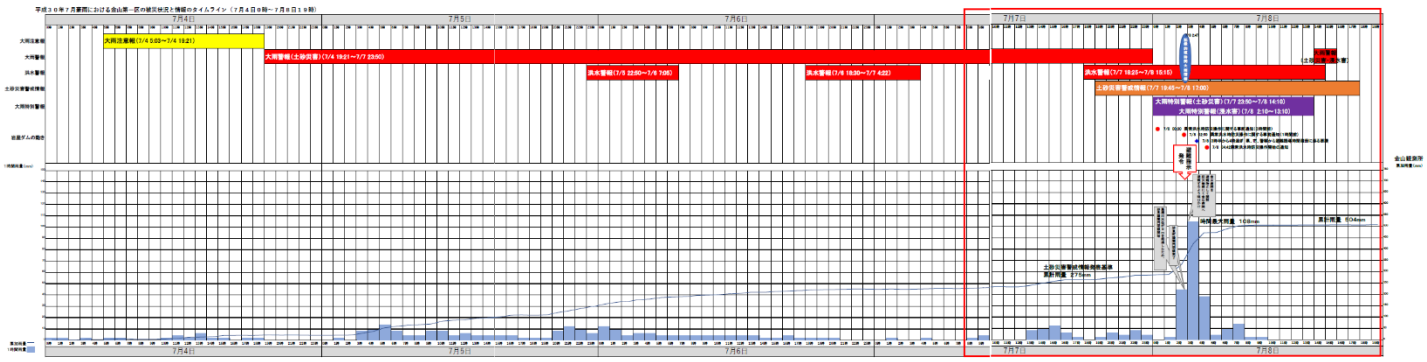
例：早い段階から気象情報等に関心を持ち、早めの避難をする。

下呂市金山地区

＜短期タイムライン＞



＜長期タイムライン＞



※下呂市金山地区のケーススタディにおける説明ポイント

・災害が発生する４日前から大雨警報が、前日の 23:50 には大雨特別警報が発令されていた。午前３時に時間最大 108mm の大雨が降った。

・馬瀬川が増水し国道 41 号につながる県道の妙見町陸閘が閉鎖されたことで集落が孤立。さらに、岩屋ダムの異常洪水時防災操作実施による馬瀬川の更なる増水の可能性が高まっていた。

・複数の谷から土砂が流出し、県道の一部が埋塞。避難経路が限られる。

・深夜、猛烈な雨が降るなか、自治会や消防団が各戸に避難を呼びかけた。

・いつ、何をタイミングにどこに避難すべきだったか、事前にどのような準備をす

べきだったのかを考えてもらう。

例：大雨警報が出た後に、明るいうちに早めの避難をしておく。

例：陸閘が締まり孤立する前に、親戚宅等に避難することも考えられる。

＜避難した関市及び下呂市の住民の気付き＞

ケーススタディにより参加者間で意見交換した後、以下の気付きを紹介することで共有する。

関市上之保地区

・急に水位が上昇するとは思わなかったし、経験もなかった。
・自宅は大丈夫との思い込みがあった。もう少し早く起きて逃げればよかった。
・早い段階から情報収集する行動を起こせばよかった。
・自宅は大丈夫と過信せず、早めの行動をとることが大切だと思う。
・早めの避難が必要。個人だけでなく上之保地区全体の意識を変えないといけない。
・早めの準備が必要。
・天気予報など、情報を早めに見る。
・体調を悪くしている人などの事を今一度考えたい
・とにかく避難は早めに自主的に避難すること。行政をあてにしすぎない。

下呂市金山地区

・スマートフォンなどで雨雲レーダーを随時確認しておけばよかった。
・避難用具を備えておけばよかった。
・警報が出る前に避難準備をしておけばよかった。
・明るいうちに自主的に避難できればよかった。
・空振りを恐れず避難することが大切。
・避難所の錠を区長が保管し、地域で開設することができるようにする。
・近所で連絡をどうとりあうか考えておく。
・子どもたちと災害や避難について話し合いを持ちたい。
・日頃、地域で話し合うことが必要。

④自宅周辺の地図を用いた災害リスクの確認･･･50～60分程度

＜ねらい＞

●ハザードマップを落とし込んだ地域の地図を使い、身近にひそむ危険を「見える化」します。

●この作業をとおして、地域における災害リスクを空間的に理解し、自宅や避難場所周辺の危険性を知り、早めの避難の必要性や、避難における安全な場所の選び方を学ぶ必要があります。

＜手順＞

（１）災害の恐ろしさを知る

①全体の流れの説明

②進行ルールの説明

③災害の映像を視聴し災害の恐ろしさを知る

（２）自宅周辺の災害リスクや避難行動の条件を知る

④自宅の場所に印をつける

⑤水害や土砂災害の発生源を書き込む

⑥避難所等、要支援者の位置を書き込む

（３）避難経路の確認と危険箇所の抽出

（４）命を守るために必要な避難手順とその課題

（５）意見交換

＜準備するもの＞

使い方	準備するもの	規格	数量	備考
テーブル配布	地区全体図	A1	5 枚	資料作成方法参照
	模造紙	A0	5 枚	
	付箋	75×75mm	適量	
	マジック	7 色入	5 セット	
会場投影	災害のビデオや写真	-	-	資料作成方法参照

※参加者 30 名（6 名×5 グループを想定）

＜資料作成方法＞

【地区全体図】

●本手引きの P.8「手順１－２　地域の災害･避難カードの様式を作る」を参考に、地区全体図を作成します。

【災害のビデオや写真】

●市町村がまとめた災害資料や保有しているビデオ等を借用し準備します。

※総務省消防庁 HP「防災・危機管理 e-カレッジ」から配信されている災害の動画を活用することも可能です。

該当ページの URL :『http://open.fdma.go.jp/e-college/』

※当ページ内の防災の基礎知識コース「風水害」を参照ください。

＜進行イメージ＞

進行	内容	備考
(1)災害の恐ろしさを知る	①全体の流れの説明 ・参加者にこれから何をするのかイメージしてもらうため、流れの説明を行う。 ②進行ルールの説明 ・堅苦しい決まりはなく、楽しく自由にかつ活発に意見交換することが重要であることを伝える ・異論があるときは否定ではなく、代案を提示するよう心がける ③災害のビデオや写真の視聴 ・参加者が災害をイメージできるよう、災害のビデオや写真を観る	総務省消防庁 HP「防災･危機管理 e－カレッジ」から配信されている災害の動画を活用する
(2)自宅周辺の	④自宅の場所に目印をつける	

<table>
<tr>
<td>災害リスクや避難行動の条件を知る</td>
<td>
・レッドゾーン、イエローゾーン、浸水想定区域にかかっていなければ、青い付箋で目印をつける。
・上記の区域にかかっていれば、赤い付箋で目印をつける。

⑤水害や土砂災害の発生源を書き込む
・以下の要領で、ペンでぬり絵をする
<table>
<tr><th>項目</th><th>ペンの色</th></tr>
<tr><td>大きな川</td><td>青色</td></tr>
<tr><td>小さな川･用水路など</td><td>紫色</td></tr>
<tr><td>谷川</td><td>茶色</td></tr>
</table>
・以下の箇所を黄色の付箋に書き、地図に貼る
・近年の災害で被災した箇所
（冠水、越水、土砂災害など）
・災害の危険性がある箇所
（土砂災害警戒区域となっている谷など）
・大雨時の避難で危険な箇所
（マンホール、ふたのない側溝、水路など）
・避難判断の目安となる箇所
（水位がここまで来たら危ないとされる場所など）

⑥避難所等、要支援者の位置を書き込む
・以下の箇所を地図に書き込む
<table>
<tr><th>項目</th><th>具体例</th></tr>
<tr><td>安全を確保できる施設</td><td>指定緊急避難場所、指定避難所、自主避難所など</td></tr>
<tr><td>災害時要支援者がいる世帯</td><td>一人暮らしの高齢者など</td></tr>
</table>
●指定緊急避難場所
洪水等による危険が切迫した状況において、住民等が緊急に避難する際の避難先として市町村が定めた場所。
●指定避難所
災害の危険性があり避難した住民等を災害の危険性がなくなるまで必要な期間滞在させ、または災害により家に戻れなくなった住民等を一時的に滞在させることを目的とし、市町村が指定するもの。
●自主避難所
住民自身が地域の申し合わせの中で一時的に開設するもの。
</td>
<td>要支援者については、個人名はふせるなど、個人情報に配慮した記載内容とすること。取組の結果を公表したり、貼りだしたりするか、要確認。</td>
</tr>
</table>

(3)避難経路の確認と危険箇所の抽出	⑦避難経路の確認と危険箇所の抽出 ・自宅から要支援者のサポートを行い避難所に行くまでの経路を矢印で記入する。 ・経路上にある危険箇所を確認する。 **<ポイント>** ・経路上の危険箇所がまだ安全なうちに避難することの重要さに気づいてもらいましょう。	
(4)命を守るために必要な避難手順とその課題	⑧命を守るために必要な避難手順とその課題 ・命を守るために必要な避難手順（連絡、声掛け支援）を考え、付箋に書き模造紙に貼る。 ・また、そのための課題を考え、付箋に書き模造紙に貼る。 **<ポイント>** 以下のとおり分類して整理しましょう。 地図から読み取れない内容でも良いです。 〇事前にすること 〇当日すること 〇課題 ・自分で解決できること ・地域で解決すること	付箋は書き出しやすいよう 75×75mm が良い
(5)意見交換	⑨意見交換 ・参加者が多く、いくつかのグループに分かれて実施した場合は、各グループでどういった話し合いがされたか、意見交換を行う ・地域で取り組むべき課題を選び、解決の手順を地域で決める。 **<ポイント>** ・各グループでの話し合いの内容を確認し、参加者の気づきを共有しましょう	意見交換の方法は、グループ毎に発表する形式でも良いし、各グループに代表者が残り、それ以外の人は他のグループを見に行き、各グループに残った代表者が内容を説明する形式でも良い

⑤ まち歩き（地域に潜む危険を知る）･･･130分程度

＜ねらい＞

●災害が起きた場所や、災害リスクが高い場所を実際に見ることで、日頃は感じていなかった危険性について、実感を持って理解することができます。
また、住民間で視点や情報を共有することにより、地域で語り継がれる避難判断の目安※などの伝承の場としての役割も期待できます。

●日頃安全と思っていた場所も、大雨の時、夜間、災害が起きた時などにおいて、避難するには危険が伴うこと、予想外に時間を要することを理解し、早めの避難や、避難における安全な経路の選択に役立てます。

※地域の取り決めとして、大きな石が水没しはじめたことを受けて避難の声掛けを始めることをしている。等

＜手順＞

（１）まち歩きの実施

①浸水想定や過去の浸水範囲、レッドゾーン、イエローゾーンを確認。
②マンホール、ふたの空いた水路、ガードレールの切れ目など避難行動の阻害要因となる箇所を確認。

（２）意見交換の実施

③各グループで意見交換を実施し、気づきを共有。

（３）講評

④主催者よりまち歩きを通じた講評を行う。

＜準備するもの＞

使い方	準備するもの	規格	数量	作成方法
参加者配布	まち歩き用地図	A3	30 枚	資料作成方法参照
テーブル配布	まち歩き用地図	A1	5 枚	資料作成方法参照
	付箋	75×75mm	適量	
	筆記具	–	適量	

※参加者 30 名（6 名×5 グループを想定）

＜資料作成方法＞

【まち歩き用地図】

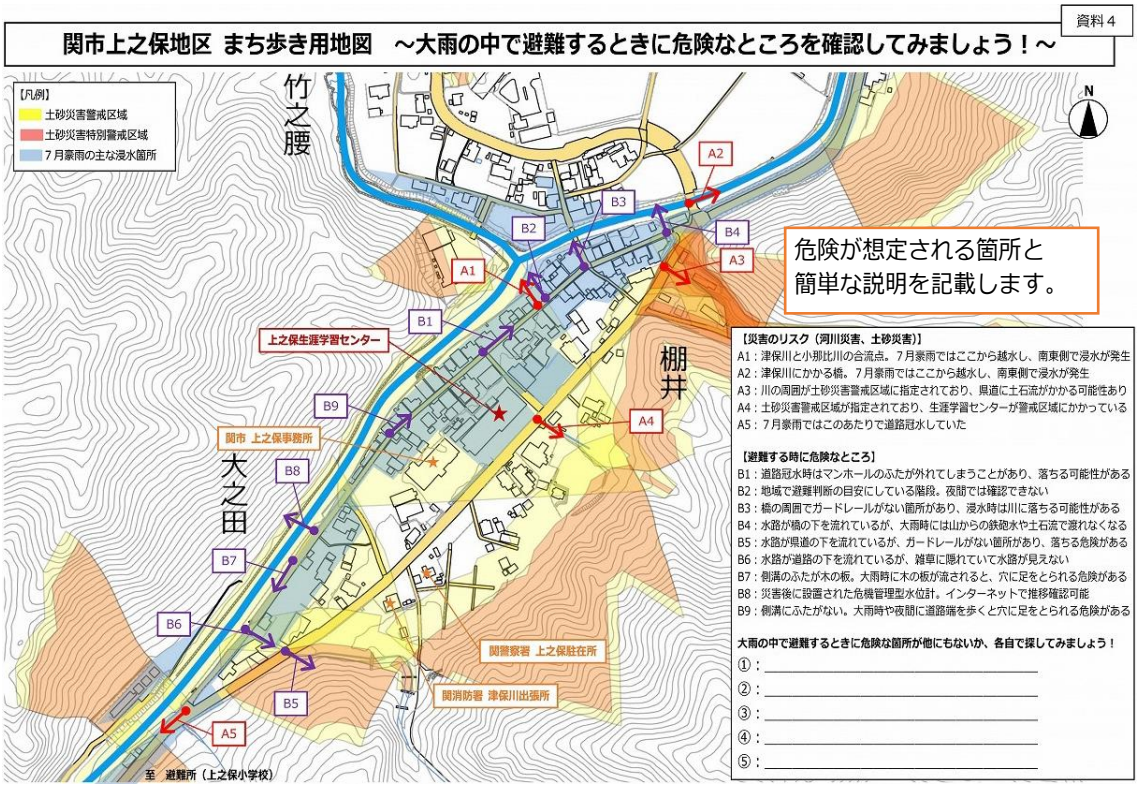
●本手引きの P.8「手順１－２　地域の災害･避難カードの様式を作る」を参考に、地区全体図を作成します。

●下図を参考に避難経路となる道路において、あらかじめ災害のリスクがある箇所及び避難の阻害要因となる箇所を調査しておき、地区全体図に印をつけます。

●印をつけた箇所の簡単な説明を記載します。

災害のリスクがある場所・・・土砂災害レッドゾーン、イエローゾーン、浸水想定区域等

避難の阻害要因となる箇所・・マンホールやガードレールの切れ目など



<スタッフの構成>

●まち歩きを円滑に進めるために、以下のとおりスタッフを配置します。

１グループにつき３～４名のスタッフが付き添い、一緒に歩きます。

・説明係…過去に災害があった場所など、注目してもらいたいポイント等で参加者の気付きを促すように説明を行います。

・記録係…まち歩きの様子を写真で撮影したり、参加者の発言の中で注目すべき内容等を書き留めます。

・安全係…参加者が車道等に大きくはみ出さないように見守るなど、安全に注意を払います。

<進行イメージ>

進行	内容	備考
(1)まち歩きの手順説明	①まち歩きの手順説明を行う ・まち歩きの趣旨 ・まち歩きの流れ ・意識していただきたいポイント （例）災害時に危険な場所、避難所等の確認 ②留意事項を説明する ・交通安全に配慮しスタッフの誘導に従うこと ・体調不良等があればスタッフに声をかけること **<ポイント>** ・避難場所までのルートの確認と、避難する際に危険な場所を確認することを説明しましょう	あからじめ、説明係、記録係、安全係を決めておく
(2)グループ分けと出発準備	③主催者よりグループ分けを発表する ・各グループに帯同するスタッフを紹介する ④まち歩きのルートを確認する ※複数のグループがいる場合、ルートを別々にしておくと説明する地点での渋滞を防ぎ、円滑に進行することができます。 **<ポイント>** ・スタッフが帯同して一緒に説明･確認しながらまち歩きを行うことを説明しましょう	参加者数に応じてグループ分けを行う。円滑な進行を考え、１グループ８名以内が好ましい。
(3)まち歩きの実施	⑤各ルートでまち歩きを始める ・各グループにスタッフが数名付き、説明、説明補助、記録、安全確認等を行う ・あらかじめ地図に印をつけた箇所を１つ１つ確認しスタッフから説明を行う （P.42 説明時のポイント参照） ・終了後、意見交換を行う会場へ誘導する	危険箇所などを説明したり、参加者が話したりしていると時間がかかるので、まち歩きの時間は長めに確保しつつ、当日の時間管理に気を付ける。

	<ポイント> ・経路上の危険箇所がまだ安全なうちに避難することの重要さに気づいてもらいましょう。 ・水分補給やお手洗い等、適宜休憩を取る	
(4)意見交換	⑥各グループで意見交換を始める ・まち歩きでの気付き、感じたことを付箋に書き、を A1 のまち歩き地図に貼る ・貼った付箋の内容を参考に意見交換を行う ・各グループのスタッフが進行補助を行う ・意見交換が落ち着いたところで、参加者にまち歩き地図を壁に貼り出してもらう **<ポイント>** ・まち歩きで気付いたことを付箋に書き出しましょう ・記録係は、まち歩き中にメモした参加者の気づきを紹介しましょう ・１つの感想につき１枚の付箋を用意し、些細だと思う事でも書いてみましょう	講評も含め、ＷＳ後も、日常的に意識することや、家族等で歩いてみることを進める
(6)講評	⑦主催者よりまち歩きの講評を行う **<ポイント>** ・普段は安全だと思っている（危険だと思っていない）場所が、災害時には危険な場所に変わる可能性があるということを共有しましょう ・家族や近隣の人と一緒に、家の周りや避難場所までのルート上でまち歩きをやってみるよう案内しましょう	

<説明時のポイント>

・災害の危険性がある場所や避難の阻害要因を現地で確認し、場所を把握する。
・身の回りに予測される危険を現地確認し、それが形として現れる前に早めに逃げることの必要性を理解する。
・実際に避難行動にかかる時間を体感する。
・避難の阻害要因により、避難には思ったより時間がかかることを理解する。
・安全に避難するための手順と、それにかかる時間を考える。

<まち歩きで着目すべき箇所>

・近年の災害で被災した箇所（冠水、越水、土砂災害など）
・災害の危険性がある箇所（土砂災害特別警戒区域となっている谷など）
・大雨時の避難で危険な箇所（マンホール、ふたのない側溝、水路など）
・避難判断の目安となる箇所（水位がここまで来たら危ないとされる場所など）

・説明係が中心となり、経路上の危険箇所で、参加者の気付きを促すように説明します。
・災害時の写真などが残っていれば、現地で写真を見せながら説明を行うことが効果的です。
・被災時の写真がない場合は、後で撮影した画像に、災害時の様子を聞き取るなどして把握し、浸水時の様子を写真に茶色いで示し再現すると効果的に説明ができます。

＜説明する内容を事前にまとめた事例＞

まち歩きの実施時に参加者に必要な内容を確実に伝えるため、事前に説明するポイントを写真等でまとめ、スタッフ間で共有しておくことが必要です。以下にまとめた事例を示します。

関市上之保地区の例

●津保川と小那比川の合流点。７月豪雨では、ここから越水し、南東側で浸水が発生

・津保川と小那比川の合流点。７月豪雨の時はここで南東側に越水し、道路を水が流れた。
・現在では水位が低く河川敷も広いが、当時は溢れるほどの水量があったことを想像してもらう。

●土砂災害警戒区域が指定されており、生涯学習センターが区域内にある

・生涯学習センターの南側の山が土砂災害特別警戒区域に指定されている。
・生涯学習センターは土砂災害警戒区域内にある。

●道路冠水時はマンホールのふたが外れてしまうことがあり、落ちる可能性がある

・普段何気なく歩いている道路でも、大雨の時は、マンホールが外れる可能性がある。
・深夜や泥水が流れている中の避難では、マンホールに気付かず、ふたが外れていると、引き込まれるおそれがある。

●地域で避難判断の目安にしている階段。夜間には確認できない

・７月豪雨の時、この階段で水位を確認していた。
・明るいうちは確認できたが、夜間は周囲に明かりがないと見えないのではないか。
・目安にするとしても、夜に大雨が降った時のことを考えておく必要があるのでは。
・７月豪雨の時は、より川上で越水したため、道路側から水が流れてきた。

●水路が県道の下を流れているが、ガードレールがない箇所があり、落ちる危険性がある

・山からの谷川が、県道の下を通っている箇所。

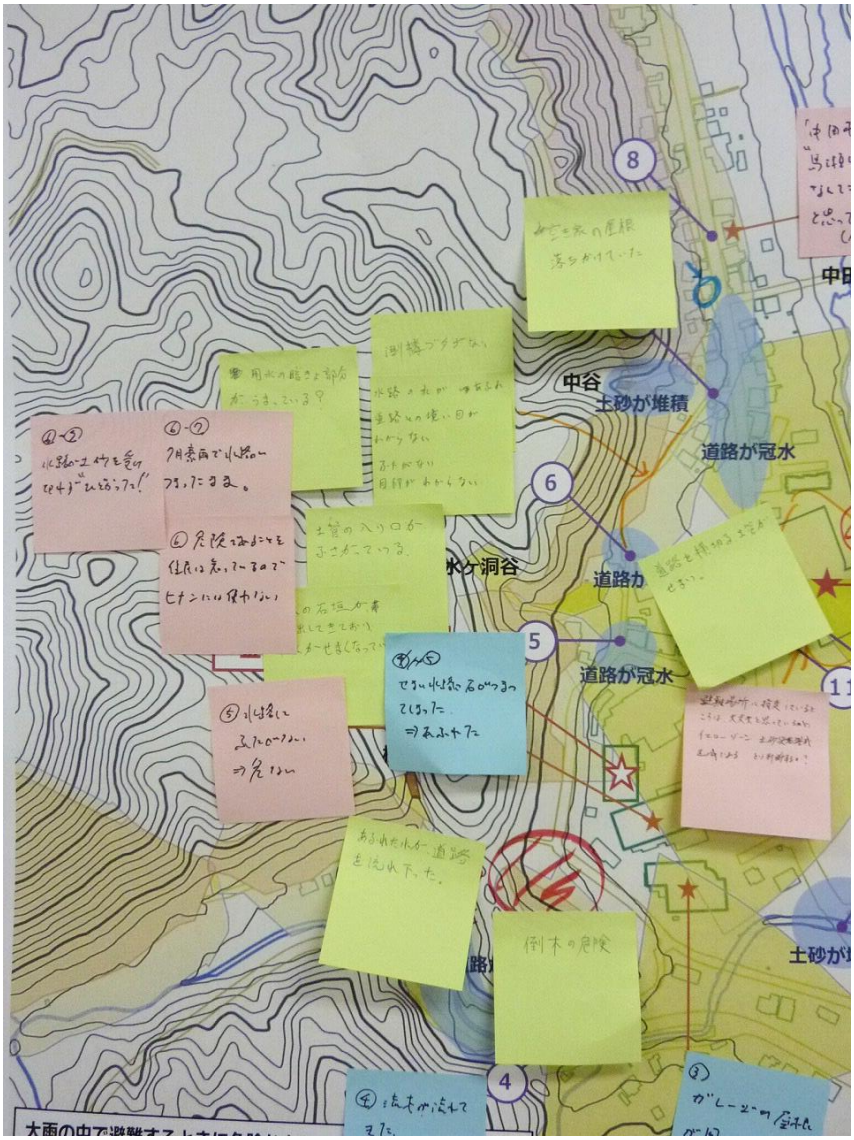
・金網とガードレールの間が１mほど開いており、特に夜間は落ちる危険性がある。

・県道が土砂災害特別警戒区域となっており、土砂災害により通れなくなる可能性がある。

＜各グループでの意見交換＞

まち歩きで気づいたことや感じたことを付箋に書き出し、地図上に貼り出します。

張り出された意見を集約し、講師や主催者により、まち歩きの講評を行い学びを共有します。



手順2－3　災害の危険を回避するための情報を学ぶ

≪背景と目的≫

●大雨による災害は、前触れなく起きることはありません。災害の危険を予見し回避するために必要な気象や避難の情報はテレビやインターネットから容易に取得することができ、注意報等初期の段階で避難すれば、安全に行動することができます。

●危険に遭遇する前に避難を判断するためには、気象や避難に関する情報の入手方法を知り、使いこなし方を知っておく必要があります。

●災害の危険を回避するための情報を学ぶことで、自発的にこれらの情報に関心を持ち、行動に結び付けるようにすることが重要です。

≪実施内容≫

①資料を使った気象情報、警報の危険度分布、水位情報、避難情報の説明

・・・30分程度

<ねらい>

●気象情報、警報の危険度分布、水位情報、避難情報について、体系的に学びます。

●これらの情報は、難解な部分があり、使いこなしは容易ではありません。自ら避難を判断できるように情報の内容を理解する必要があります。

●また、これらの情報は、気象台や県、市町村など、それぞれ情報発信元が異なるため、必要な情報に応じた入手方法を知っておく必要もあります。

<手順>

（１）気象情報について学ぶ

①大雨に関する気象情報について、インターネット（岐阜地方気象台の HP 等）から入手する手順と見方について説明。

②テレビやラジオにおける危険度や重大性を示す表現の違いを説明。

（２）警報の危険度分布について学ぶ

③土砂災害、浸水害、洪水の危険度の高まり情報を入手する手順と見方について説明します。

（３）水位情報について学ぶ

④洪水予報河川や水位周知河川の水位情報を取得する手順と見方を説明します。

⑤氾濫の危険度に応じた４段階（氾濫注意情報、氾濫警戒情報、氾濫危険情報、氾濫発生情報）の水位決定について説明します。

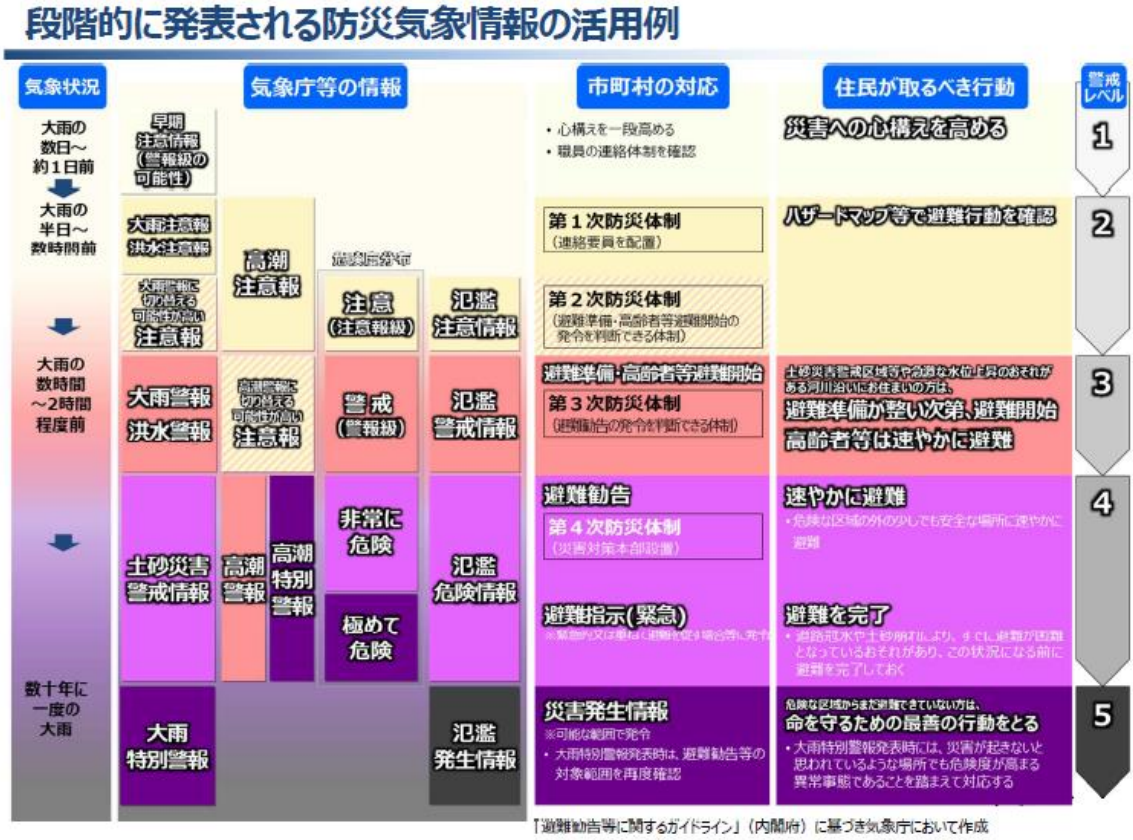
⑥その他中小河川の水位情報を取得する手順と見方を説明します。危機管理型水位計の設置と、設定された避難判断参考水位について説明します。

（４）避難情報について学ぶ

⑦避難準備・高齢者等避難開始、避難勧告、避難指示など、市町村から発令される避難情報について、住民のとるべき行動と関連づけながら説明します。

⑧気象、水位、警報の危険度分布の各段階の情報が避難情報にどう対応するか体系的に説明します。

⑨防災行政無線や登録制メール、自治体 HP など自治体からの避難情報の伝達方法や、連絡網など自治会における情報伝達の仕組みについて説明します。



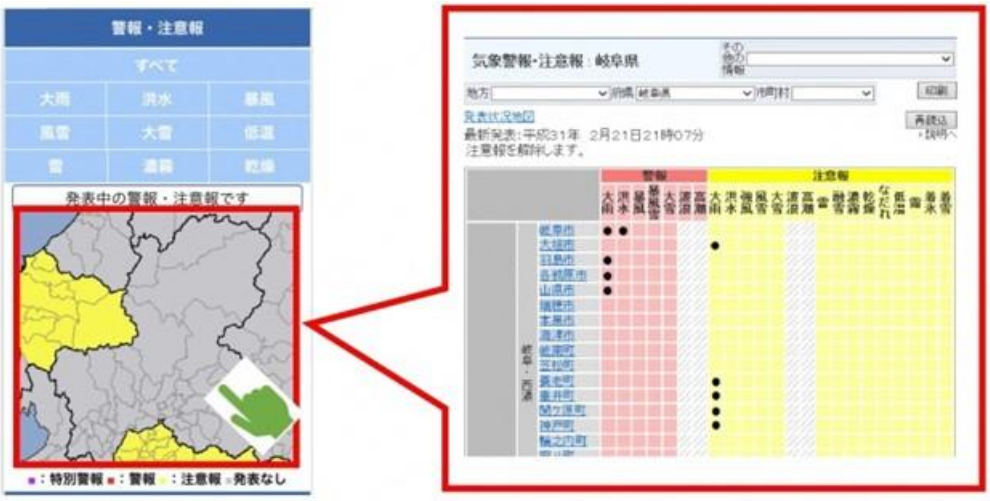
＜確認するホームページ＞

・岐阜地方気象台	https://www.jma-net.go.jp/gifu/
・ぎふ山と川の危険箇所マップ	http://kikenmap.gifugis.jp/
・岐阜県川の防災情報	http://www.kasen.pref.gifu.lg.jp/
・川の水位情報	https://k.river.go.jp/
・自治体	個別に自治体 HP を検索してください

＜各 HP から該当箇所を表示する手順（画像はスマートフォン版）＞

①気象情報「気象情報を知るには？」

岐阜地方気象台の HP から自分の地域の気象情報や警報の危険度分布を得るための手順を伝えます。



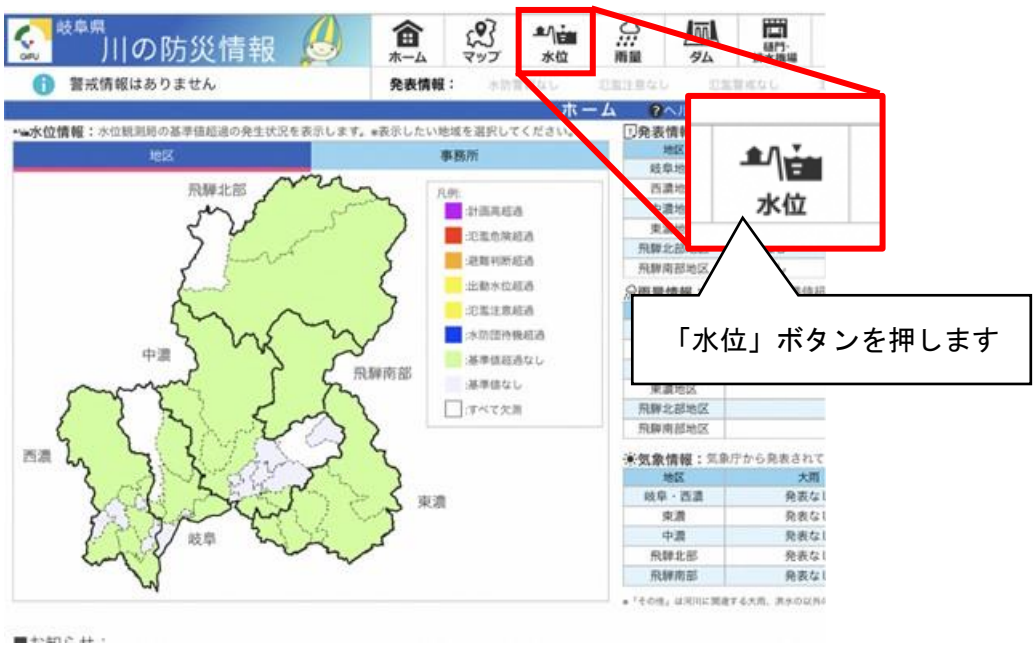
②警報の危険度分布「土砂災害の危険度の高まりを知るには？」

③警報の危険度分布「大雨（浸水害）の危険度の高まりを知るには？」

④警報の危険度分布「洪水の危険度の高まりを知るには？」

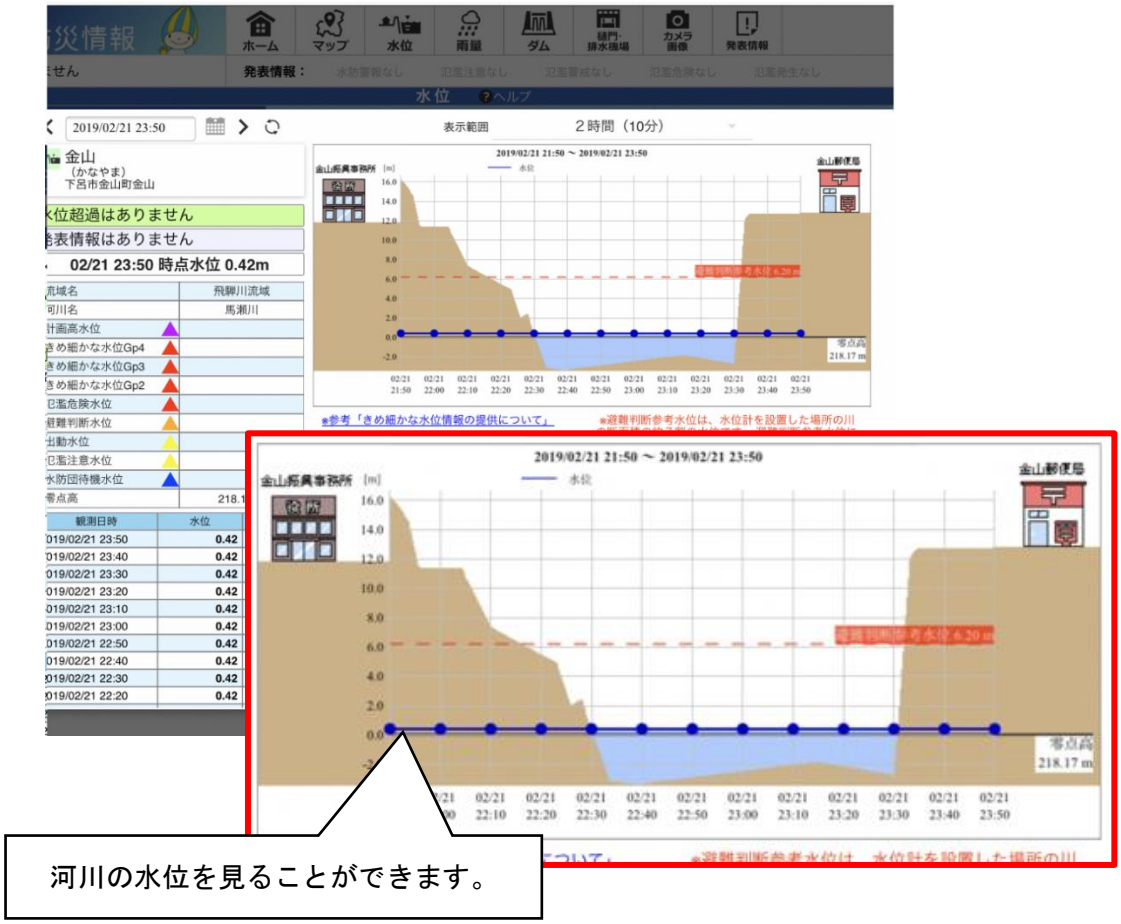
⑤水位情報「洪水予報河川等の水位を知るには？」

岐阜県川の防災情報より洪水予報河川や水位周知河川の水位情報を取得するための手順を伝えます。



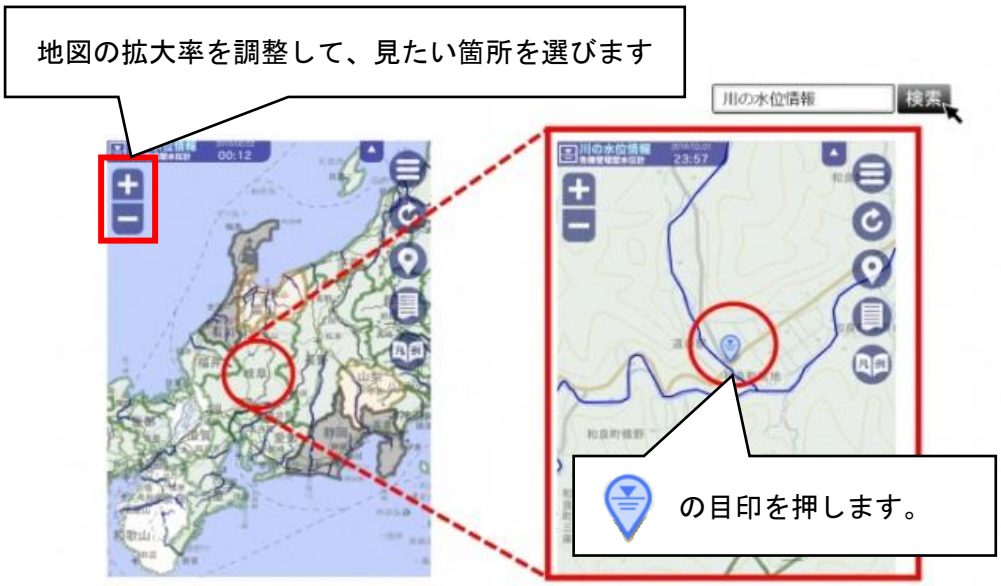
該当の地区を選択します

見たい河川の観測所名を押します

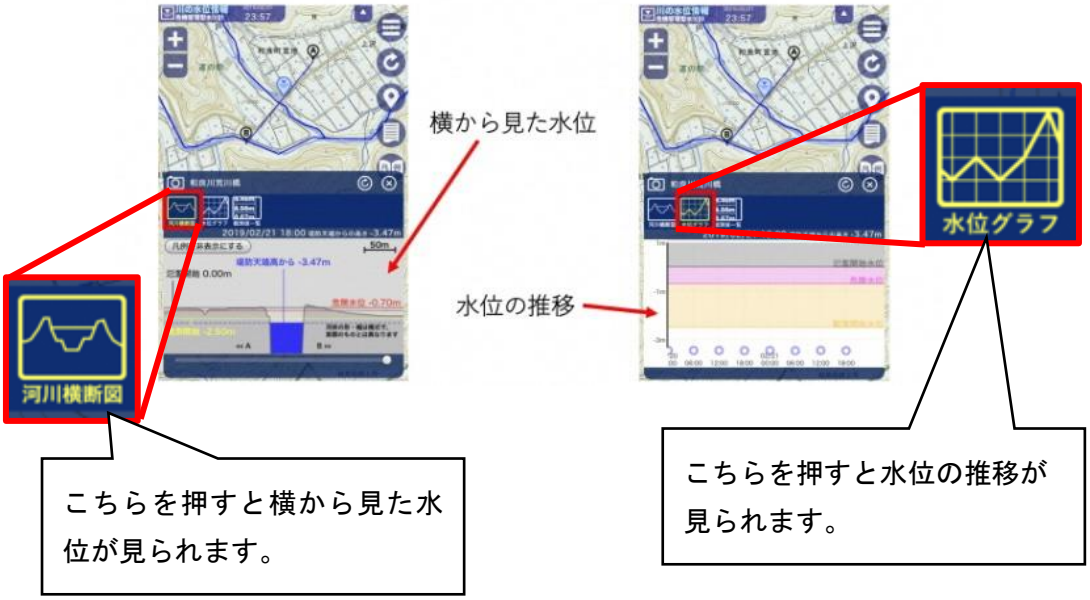


⑥水位情報「その他中小河川の水位を知るには？」

川の水位情報 HP より、その他中小河川の水位情報を取得するための手順を説明します。



●和良川の水位を知るには？



手順2－4　一人ひとりの避難の手順を学ぶ

≪背景と目的≫

●実際に避難することを判断しても、どこに逃げるか、誰と逃げるか、何を持って逃げるか、どのような準備をして逃げるか、といった様々な判断が必要です。
●避難の判断が早くても、安全な場所に着くまでに時間がかかっては、避難ルートで危険に遭う可能性も高まります。
●確実に安全な場所に避難するためには、あらかじめ、避難の手順を考え、決めます。

≪実施内容≫

●ここでは災害・避難カードの様式を使用して作業します。厚紙等、清書用の様式は「手順２－５　災害・避難カードを作る」にて使いますので、当手順では、A3普通用紙にカラーコピーをしたもの（下書き用）で作業してください。
●今回書く下書きが、一人ひとりの避難計画に反映されます。よって、指導者や補助要員のスタッフが、参加者の記入内容を見ながら、危険箇所に避難することになっていないか、地域の取決めが反映されているかなど助言をし、実効性のある内容となるよう十分に配慮してください。
●次の①～③までの取組みを実施する際に、記入した内容等を参加者同士で見せ合い、自分のものと他のものを比べながら修正する時間を、それぞれ取るようにしてください。

①安全な避難場所と避難経路の検討･･･20分程度

＜ねらい＞

●安全な避難を行うためには、土砂災害のレッドゾーンやイエローゾーン、浸水想定区域にかからない所を避難場所に選び、自宅から出発し、声掛けして一緒に逃げる方の家を経由し、避難場所まで行くための経路を決め、その間における災害の危険箇所や避難の阻害となるような箇所を把握しておくことが必要です。
●ここでは、避難しようとしていた場所が安全かどうか確認し、真に安全な避難場所を選ぶこと。また、避難経路の危険箇所を把握することにより、大雨時にその危険が顕著になる前の、早めの避難を認識することが目的となります。

＜手順＞

●自宅、要支援者等の場所を、判例に従い、地図に記入します。
●土砂災害特別警戒区域（レッド）や土砂災害警戒区域（イエロー）、浸水想定区域

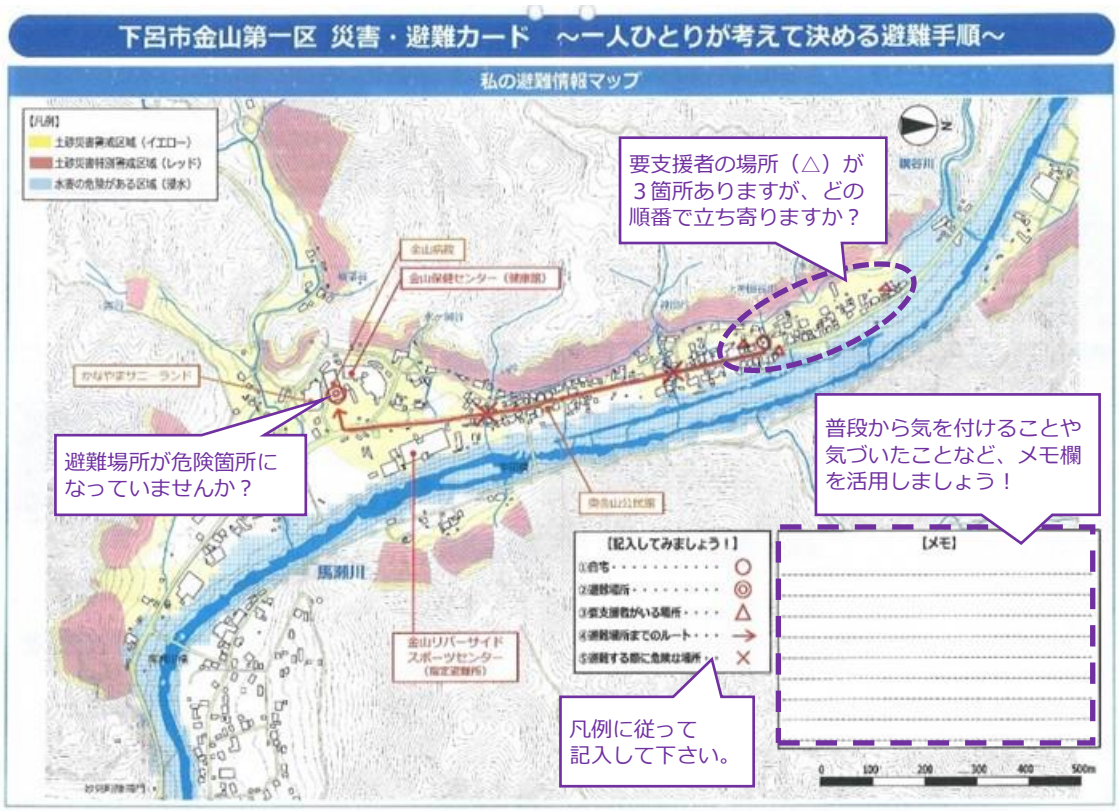
にかかっていない避難可能な場所に「◎」を記入します。複数記入してもかまいません。親戚や知人宅等の場合は、避難可能か確認した後に記入してください。

●実際に避難する場所を選んで、自宅を出発後、要支援者等一緒に避難する方の家を経由して避難する経路を、判例に従い、地図に書き込みます。

●避難経路上にある避難の阻害要因になるような箇所（避難する際に危険な場所）について、「×」を記入してください。

●メモ欄には、普段から気を付けることや、気づいたことなどを記入します。

【記入例】



＜準備するもの（主なもの）＞

・災害・避難カードの様式（下書き用）

・自治会など、地域で避難時における要支援者等への声掛け等に取決めがある場合は、その体制表など

②避難に必要な時間等の検討･･･20分程度

＜ねらい＞

●避難を決断してから、安全な場所に到着するまでには、避難の準備から、避難場所への移動の時間、近所や要配慮者への声掛けなど、多くの時間が必要です。 ●災害の危険が迫った時には、「避難を完了していること」が重要であるため、各自が、避難にかかる一連の手順を決め、必要となる時間を把握し、間に合うようなタイミングで避難を開始することが必要です。 ●避難に必要な時間の計算の中には、誰と避難するか、何を持って避難するか、といったこともあらかじめ確認します。

＜手順＞

災害・避難カードの様式裏面の各シートを使って行います。

●安全な場所は？

・「①避難に必要な時間は？」の「A. 安全な場所は？」に、大雨時に安全と考える場所（避難所等）を記入します。

・レッドゾーン、イエローゾーン、浸水想定区域の外であることを確認し、問題なければチェックボックスにチェック済みの印を記入します。

●誰と避難する？

・「②誰と避難する？」に、一緒に避難する人の名前と、連絡先を記載します。

・自治会など、地域で声掛けの取決めや支援者の割り当てがある場合は、支援者の名前と連絡先も記載してください。

●何を持って避難する？

・「③何を持って避難する？」に、自宅等から避難所に持っていくものを記入します。

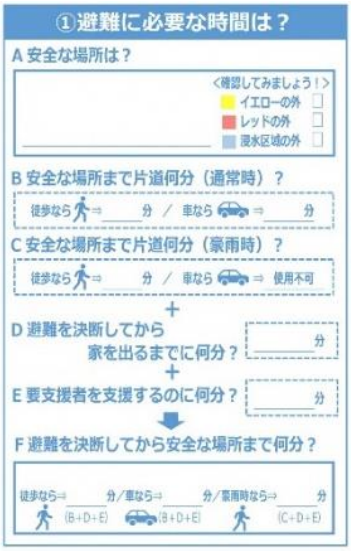
・いざという時に準備に時間を取られないよう、あらかじめ、避難の時に何を持っていくか決めておき、すぐに持ち出せるように準備しておくことが重要です。

・持っていこうとしているものが、大きさや重さの点で運ぶことが困難な物品を選

んでいないかどうかチェックします。

・自治体 HP 等に記載されているリストを参考に、大雨時に必要なものを選び、避難する時に持っていくもののリストを作成します。

●避難に必要な時間は？



・「①避難に必要な時間は？」の計算シートを使って、避難に必要な時間を計算します。

・「B 安全な場所まで片道何分（通常時）？」に、徒歩の場合と車を使った場合の所要時間を記入します。

・「C 安全な場所まで片道何分（豪雨時）？」に、徒歩の場合の所要時間を記入します。豪雨時は通常時と違い移動に危険が伴うため、時間がかかることに留意してください。（車は冠水等で使用できません）

・「D 避難を決断してから家を出るまでに何分？」に、身支度や持出品準備等にかかる時間を記入します。

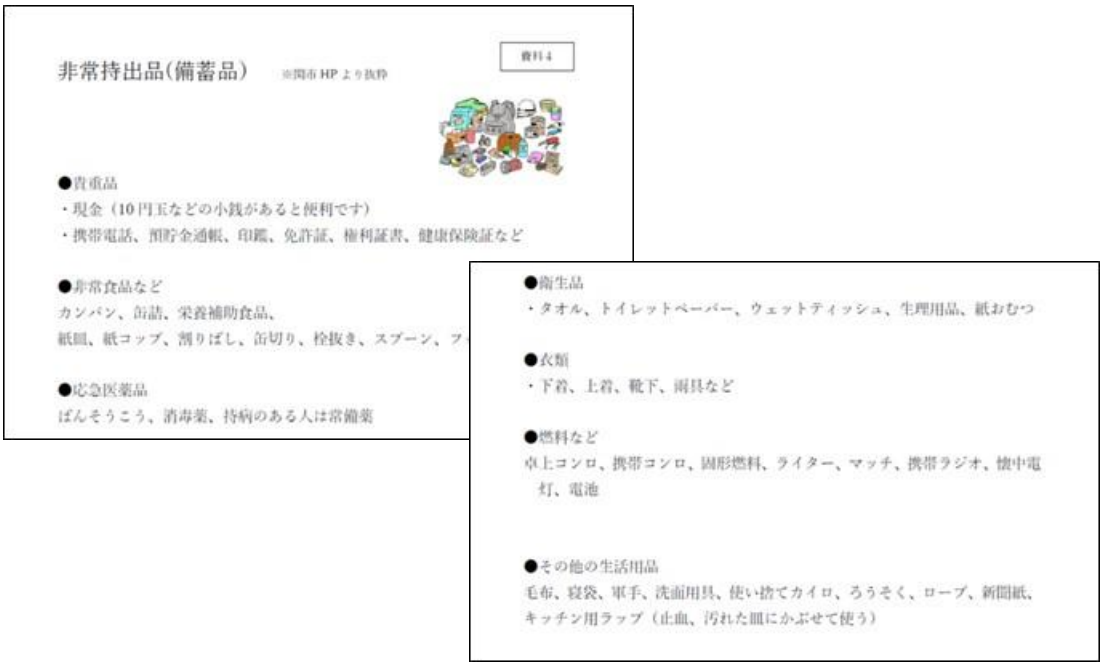
・「E 要支援者を支援するのに何分？」に、「②誰と避難する？」に記入した方と一緒に避難するためにかかる時間を記載します。

・F に、それぞれ合計の時間を計算して記入します。

＜準備するもの（主なもの）＞

・災害・避難カードの様式（下書き用）

・非常持ち出し品リスト（自治体ＨＰや防災ガイドブックより）　など



【記入例】

いざという時に助け合えるよう、普段から
災害時の行動などを話し合っておきましょう！

連絡の取れる電話番号などを記入
しておきましょう！

①避難に必要な時

A 安全な場所は？

スポーツセンター

<確認してみましょう！>
- イエローの外 ☐
- レッドの外 ☑
- 浸水区域の外 ☐

B 安全な場所まで片道何分（通常時）？

徒歩なら ⇒ 10 分 ／ 車なら ⇒ 2~3 分

C 安全な場所まで片道何分（豪雨時）？

徒歩なら ⇒ 15 分 ／ 車なら ⇒ 使用不可

＋

D 避難を決断してから家を出るまでに何分？ 10 分

＋

E 要支援者を支援するのに何分？ 0 分

F 避難を決断してから安全な場所まで何分？

徒歩なら ⇒ 20 分（B+D+E）／ 車なら ⇒ 13 分（B+D+E）／ 豪雨時なら ⇒ 25 分（C+D+E）

②誰と避難す

誰と？	連絡先は？
妻 犬2匹.	ケイタイ.

③何を持って避難する？

何を？	大きさは？	重さは？
現金.印かん.通帳. LEDライト・ 食品.水 500mlx2 ヘルメット.手ぶくろ. 衣類.タオル.	リック	10K
		【合計】 10 kg

何に何分かかるかをイメージし、事前に準備
できるものがあれば準備しておきましょう！

「薬」はどんな薬があると良いでしょうか？
「食料」は何を何日分、何人分持って行きますか？
「水」は何リットル持って行きますか？
「旅行カバン２個」「20kg」は、自分が持って避難できる
量なのか確認しておきましょう！

③安全に避難するためのタイミングを考える･･･20分程度

＜ねらい＞

●避難を完了しなくてはならないときまでに、「情報に関心を払う」、「最新の情報をこまめに確認」、「速やかに避難開始」、「避難を完了」といった４つのタイミングをそれぞれ決めます。

＜手順＞

（１）日中における避難タイミングの検討

①いつまでに避難を完了する必要があるかを決め、避難にかかる時間を逆算したタイミングで避難する手順を決めます。

（２）夕暮れ時における避難タイミングの検討

②避難しなければならないタイミングが夜間～早朝にかけて発生することが予想される場合、夕暮れ前に避難を開始する手順を決めます。

＜準備するもの＞

使い方	準備するもの	規格	数量	作成方法
テーブル配布	災害･避難カード	A3	30 部	資料作成方法参照
	筆記具	－	適量	
会場掲示	私の避難タイミング	A０	１枚	資料作成方法参照

※参加者 30 名（6 名×5 グループを想定）

＜資料作成方法＞

【災害･避難カード】

●本手引きの P.8「手順１－２　地域の災害･避難カードの様式を作る」で作成したものを使用します。

【私の避難タイミング】

●当データのうち、「私の避難タイミング」の部分を A0 判で出力し貼り合わせる。

<進行イメージ>

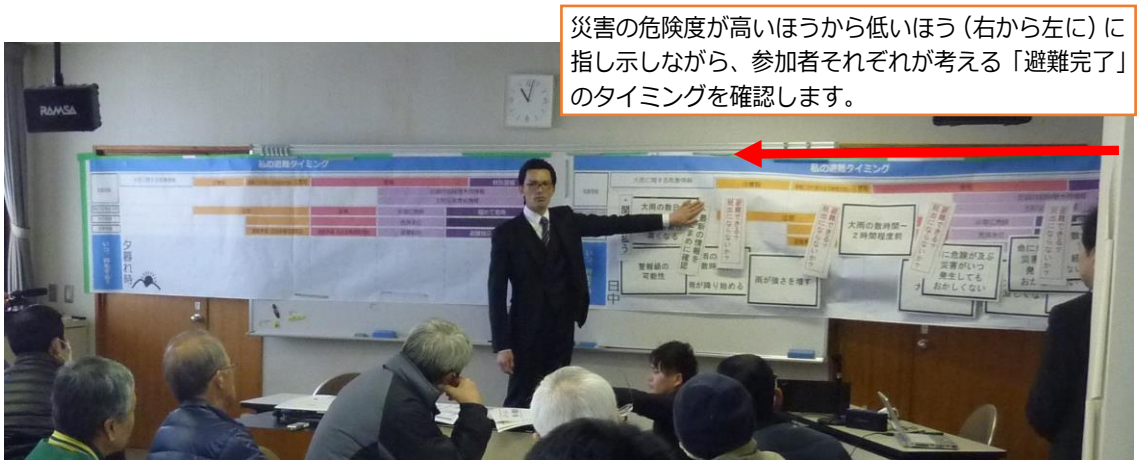
進行	内容	備考
(1)日中における避難タイミングの検討	①「避難完了」のタイミングの検討 ・災害･避難カードの裏面上部にある「私の避難タイミング」にて、各種情報を災害の危険度が高いほうから低いほうに（右から左に）順番に見ていき、その時の河川や降雨の状況を想像し、安全に避難完了できる（脱出にならない）タイミングを考えて、災害･避難カードに記入する **<ポイント>** ・各種情報が発令されている際の雨の降り方などを想像し、徒歩や車で安全な避難ができるかを確認しましょう ②「避難開始」のタイミングの検討 ・①で決めたタイミングまでに「避難完了」するには、避難に必要な時間を踏まえ、いつ「避難開始」すべきかを考えて、災害･避難カードに記入する ③「関心を払う」「最新の情報をこまめに確認する」タイミング（期間）の検討 ・「避難開始」のために必要な、気象情報や警報の危険度分布、水位情報、避難情報の発令状況について、「関心を払う」「最新の情報をこまめに確認する」タイミングを考え、災害･避難カードにそれぞれ記入する	進行役が、災害発生時から、さかのぼるような形で、「どこで行動を開始するか」を考えさせます。 考える際は、「私の避難タイミング」を大きく印刷したものを参加者の前に貼り出し、それぞれ行動のタイミングを参加者全員で挙手しながら検討することが効果的です。 改めて、災害の危険を予知できる情報は、発生の前から出ていたことを認識してもらいます。
(2)夕暮れ時における避難タイミングの検討	④夕暮れ時における避難タイミングの検討 ・夕暮れ時の時間帯（左端が夕方、右端が深夜・早朝）を想定して、上記①～③についてそれぞれ検討し、災害･避難カードに記入する **<ポイント>** ・夕暮れ時では、夜中に災害の危険性が高い状況が訪れる可能性があります。日中よりも早めの行動が重要であることを確認しましょう	夕暮れ時は、その後の情報収集が難しくなるので、「明るいうちに行動しておく」考え方を促します。

＜早めの避難を理解する工夫＞

・講師や主催者が、時間軸に沿って各種情報が発令されている際の雨の降り方等を説明しながら、その中で避難できるかどうかを参加者に想像させます。

・そのうえで安全に「避難完了」するタイミングを、災害･避難カードの「私の避難タイミング」を使って、災害の危険度が高いほうから低いほう（右から左に）に指し示しながら、全員に手を上げさせることで確認していく方法が有効です。

・これにより、参加者間で早めに避難する意思を共有することができます。



災害の危険度が高いほうから低いほう（右から左に）に指し示しながら、参加者それぞれが考える「避難完了」のタイミングを確認します。

手順2－5　災害･避難カードを作る

≪背景と目的≫

●災害のリスクやそれを回避するために必要な情報、早めの避難の重要性など、今回の取組みで学んだことを、実行に移すことができるよう、また、家族等で共有するために、災害・避難カードを作成します。

●一連の学びの成果として、参加者一人ひとりが、自分の避難計画として、これまでの検討を踏まえ、カードの様式に書き込みます。

≪実施内容≫

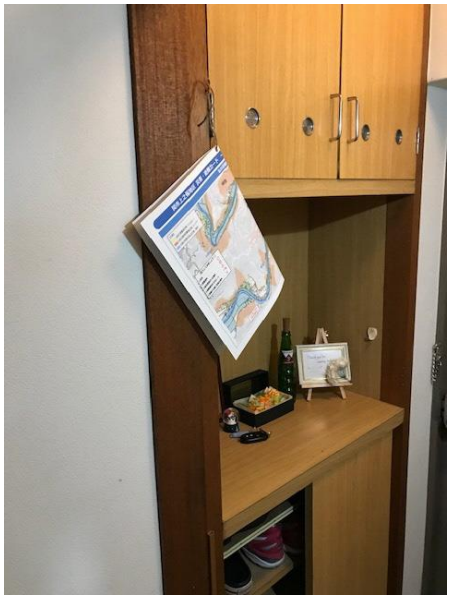
①災害･避難カードの清書･･･10分程度

・手順２－４で下書きした様式をもとに、参加者が清書用の様式に記入します。

・講師から項目ごとに留意事項を読み上げ、確認しながら書いてください。

・清書した災害・避難カードは、角に穴を空けて紐を通し、玄関や冷蔵庫など、家の中で、避難の際、見やすいところに掲示できるようにして下さい。

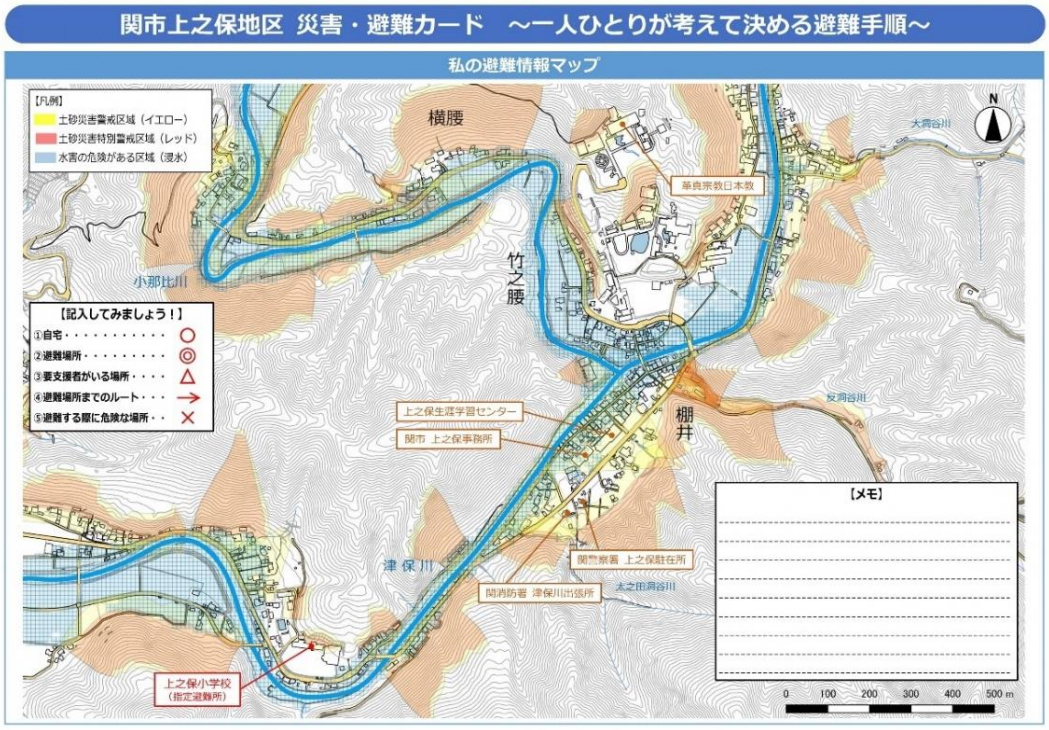
＜玄関にかけた状況＞



＜冷蔵庫にかけた状況＞

≪準備するもの≫

・災害・避難カードの様式（清書用、下書き用）



手順2－6　地域内での普及・活用方法を考える

≪背景と目的≫

- ここまでの取組みは、気象災害から命を守る方法の学びが重要であり、早めの避難に対する姿勢を身に着ける取組みといえます。
- 参加者が学んだ避難に対する考え方は、各自の命を守るものであるとともに、地域全体で共有することで、さらにその効果が高まります。
- そのため、一連の取組みを、家族や地域に普及し、作成したカードを活用するための方法について、参加者で話し合い、地域の活動の中で生かしていくことが重要です。
- 住民の転入転出、高齢化の進行による体力の低下や体調の変化などが見込まれるため、共助の内容は毎年見直しが必要です。
- 一人ひとりが作ったカードの内容を訓練等の形で地域に戻すことで、地域の防災体制の見直しにつながります。また、無理な計画になっていないかを地域ぐるみで実証したり、避難に係る新たな取決めを反映し、各自の災害・避難カードを修正していく必要があります。
- その仕組みを参加者が考えることで、地域にあった計画策定と訓練によるチェック・更新のサイクルを構築します。

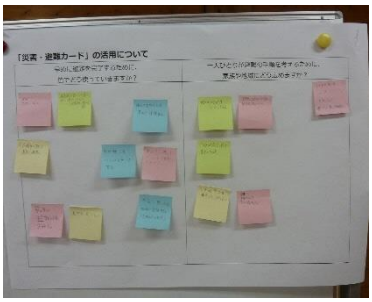
≪実施内容≫

①普及・活用方法に関する意見交換・・・30分程度

＜ねらい＞

- 一人ひとりの考えをより具体的なものとするため、グループワーク形式で参加者間で話し合います。

＜手順＞



・災害・避難カードを活用し、早めの避難の実行力をより向上させる方法を話し合います。
・参加者が取組みで得た知識や心構えを家族や地域に広めるための方法について話し合います。
・指導者や補助要員のスタッフが、参加者の意見をより具体的になるよう話題を盛り上げます。また、課題を明確にし、解決策を考えます。
・意見を付箋に書き込み、普及、活用にカテゴリを分けて貼ります。
・話し合いが終了後、各グループの意見を見せ合う、もしくは発表します。

※以下のようなものが考えられます。

・参加者が、家族や近隣の方へ配布し、記載を手伝う。 ・別の機会で、地域の避難訓練実施などに、全員にカードを配布して作成。 ・自治会の班や、家族などより小さい単位での実施を促す。 ・カードを用いた図上訓練や避難訓練の実施とその成果に基づくカード改良。

＜準備するもの＞

・筆記具、模造紙、付箋　など